

平成26年度 大仙市立中学校生徒海外派遣事業
オーストラリア研修 報告書
平成27年1月3日～11日



Report of Study Trip to Australia



大仙市立中学校生徒海外派遣日程表(計画)

■旅行日程:2015年1月3日(土)~1月11日(日)

日程		地名	現地時刻	交通機関	行程	朝食	昼食	夕食
1	1/3 (土)	大曲駅(集合) 大曲駅発 東京駅着 東京駅発 成田空港着 成田空港発	11:00	こまち18号 NEX39号 JQ026	出発式(大曲駅西口1階ホール) 新幹線にて東京駅へ 成田エクスプレスにて成田空港へ 出国手続き後、ジェットスター航空にて空路、ケアンズへ (所要7時間30分) 【機中泊】	×	×	○
			11:44 15:04 16:03 16:53 20:10					
2	1/4 (日)	ケアンズ空港着 ケアンズ空港発 マンガリフォールズ着	04:40	専用車	入国手続き後、マンガリーへ移動(所要:約1:40) レインフォレストロッジにて朝食後、休憩 オリエンテーション後、ホストファミリーと面会 ファームステイ先へ移動 オーストラリア体験生活 スタート 【ファームステイ泊】	○	○	○
			06:00 08:00 11:00					
3	1/5 (月)	マンガリフォールズ	終日		ファームステイ ホストファミリーとの生活 (家族との生活、ファームのお手伝いを体験していただきます) 【ファームステイ泊】	○	○	○
4	1/6 (火)	マンガリフォールズ	終日		ファームステイ ホストファミリーとの生活 (家族との生活、ファームのお手伝いを体験していただきます) 【ファームステイ泊】	○	○	○
5	1/7 (水)	マンガリフォールズ	10:00		各ステイ先よりマンガリーに集合(集合後、報告会) 昼食後、現地生徒(オージーキッズ)との交流[チームラフトビルド、障害物レースなど] 夕食はオージーキッズと一緒にバーベキュー 後、さよならパーティー 夕食後、土ボタル鑑賞へ出発 【レインフォレストロッジ泊】	○	○	○
			終日					
6	1/8 (木)	マンガリフォールズ ケアンズ	7:15	専用車 鉄道 専用車	ロッジにて朝食後、マンガリーを出発 キュランダ溪谷鉄道に乗り、キュランダへ【山】 (キュランダ村、アポリジニショー、アーミーダックなど) ケアンズ到着後、市内散策 徒歩にてホテルへ 【ディスカバリーケアンズ泊】	○	×	×
			9:30 15:15					
7	1/9 (金)	ケアンズ	8:30	船	ホテルにて朝食後、徒歩にて船乗場(棧橋)へ ミコマスケイ観光【海】(片道2時間) (シュノーケリング、魚の餌付けなど) 到着後、徒歩にて市内レストランへ [夕食:フィッシュ&チップス] 夕食後、学習会『海外で活躍する日本人へのインタビュー』(約60分) 徒歩にてホテルへ 【ディスカバリーケアンズ泊】	○	○	○
			17:00 20:00					
8	1/10 (土)	ホテル発 ケアンズ空港発 成田空港着 成田空港発	09:40	専用車 JQ025 貸切バス	ホテルにて朝食後、ケアンズ空港へ 出国手続き後、ジェットスター航空にて空路、帰国の途へ (所要7時間25分) 入国手続き後、到着口へ 貸切バスにて大仙市へ 【車中泊】	○	○	×
			12:20 18:45 20:30					
9	1/11 (日)	大仙市役所着	7:00		到着後、解散式 おつかれさまでした	×		

平成26年度大仙市立中学校生徒海外派遣事業派遣生徒一覧

No.	学校名	学年	生徒氏名	性別	No.	学校名	学年	生徒氏名	性別
1	大曲	2	伊藤日向	女	11	西仙北	2	嵯峨麗夏	女
2	大曲	2	佐々木朱莉	女	12	西仙北	2	田口輝	男
3	大曲	2	佐々木央理	男	13	西仙北	2	寺山莉奈	女
4	大曲	2	佐藤泉	女	14	中仙	2	吉川康太	男
5	大曲	2	佐藤奈緒燎	男	15	豊成	2	相馬啓人	男
6	大曲	1	加藤遥	女	16	豊成	2	高橋元気	男
7	大曲西	1	山崎未夢	女	17	協和	2	柳館沙耶	女
8	大曲南	2	沢野遥子	女	18	南外	2	鈴木竜也	男
9	大曲南	2	宮野希歩	女	19	仙北	2	大釜千佳	女
10	平和	2	佐々木彩乃	女	20	太田	2	加藤雅則	男



事前説明会

10月9日(木) PM 6:00～ ・派遣生等紹介 ・教育指導課長より ・諸連絡(教育指導課) ・パスポート取得、旅行準備について(日本旅行) ※海外旅行お伺い書(パスポートコピー貼付け)の提出 ※FARMSTAY QUESTIONNAIRE(ファームステイ質問書)・保険申込書の提出	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
12月19日(金) PM 6:00～ ・ファームステイ及び日程についての最終確認等(日本旅行) ※燃油サーチャージ料、保険料の提出 ・緊急連絡先等記入及び提出(教育指導課教育研究所)	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室

事前学習会

10月30日(木) 第1回学習会 PM 4:30～6:00 ・CIRによるオーストラリアの文化紹介 ・自主研究テーマの設定 その他	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
11月25日(火) 第2回学習会 PM 4:30～6:00 ・自主研究テーマの提出(面接により、自主研究テーマを広げる・深める) ・英会話レッスン(自己紹介・機内・税関・ショッピング・ホテル・道をたずねる・乗り物にのる) ・出入国カードの記入について	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室
12月26日(金) 第3回学習会(結団式) AM 9:30～PM 3:30 ・自主研究についての事前活動(各課訪問インタビュー) ・結団式 ・ファームステイグループごとの打ち合わせ(日本文化紹介準備活動等) ・作成レポートについて(様式、枚数、締め切り等) ・報告会について	場所: 大曲図書館3F 視聴覚室

オーストラリア海外研修

1月3日(土)～1月11日(日)	場所: オーストラリア(ケアンズ)
------------------	-------------------

報告会・解団式

2月16日(月) 報告会及び解団式 PM 3:00～4:45 ・代表者感想発表 ・グループに分かれて「グループ内個人発表」 ・グループ協議	場所: 仙北ふれあい文化センター
--	------------------

結団式

派遣生徒代表誓いの言葉

私が今回この派遣事業に参加しようと思ったのは、自分の英語がどれだけ海外で通用するのか、試してみたいと思ったからです。

私が一年生の時の英語の先生は、「アイコンタクト」をととても大切にしていました。「アイコンタクト」をすることで、伝える相手とより向き合うことができ、コミュニケーションへとつながっていくと思います。オーストラリアへ行くと、言葉が相手に伝わらないことがたくさんあるはずです。しかし、相手と向き合い伝えようとする気持ちを「アイコンタクト」で表せば、完璧な英語でなくても、自然と言葉の壁を越えていけると思います。

私の研究テーマは、「地産地消」についてです。オーストラリアで行っている地産地消から、秋田の地産地消に生かしていけるようなところを、自分の目で見つけてきたいと思います。また、地産地消のことだけでなく、衣食住など日本とは違う部分がたくさんあると思うので、日本とオーストラリアを比べて、共通点や相違点からも文化を学んできたいと考えています。

このような機会を与えてくださったことに感謝し、大仙市の中学生代表という自覚をもって、有意義な時間を過ごしていきたいと思います。

大曲中学校 佐藤 泉



派遣生徒代表誓いの言葉

私が今回この大仙市立中学校生徒海外派遣事業に応募した理由は、二つあります。

一つ目は、将来のために役立てたいと思ったからです。私は、2020年に行われる東京オリンピックに、何かしら関わりたいと考えています。そこで、海外から来た人々が言語で困っている時に、通訳として助けるお手伝いをしたいと思います。オーストラリアで学ぶことを通じて、いろいろな人とコミュニケーションをとれる力を付けられるよう頑張りたいと思います。

二つ目は、憧れの先輩がこの海外派遣事業に行っていて、うらやましいと思ったからです。この事業に参加できることを、本当に嬉しく思っています。

オーストラリアは世界でも有名な観光地で、きれいな海やオーストラリア特有の動物など、自然をととても大切にしている国だと思います。私は、なぜそんなにオーストラリアは自然が豊かなのか気になっています。自然が豊かなのは、土地や気候だけでなく、人間が関わっているからだと思うので、日本とオーストラリアはどのように違うのか調べてきたいと思います。

そして、この研修を通じて初めて出会った皆さんとよい思い出を作りたいです。このような機会は、私たちの人生の中でも、あるかないかの出来事なので、一時一時を精いっぱい楽しんできたいと思います。

仙北中学校 大釜千佳



H 2 6 年度海外派遣生徒自主研究テーマ一覧

No.	中学校名	学年	生徒氏名	性別	自主研究テーマ
1	大 曲	2	伊藤日向	女	日本の伝統食を受け継いでいくためには、どうするべきか？
2	大 曲	2	佐々木朱莉	女	地球に優しい環境をつくるために、私たちに何ができるだろうか？
3	大 曲	2	佐々木央理	男	自然環境と水資源を大切にするために、家庭では何をすべきか？
4	大 曲	2	佐藤泉	女	地産地消を活発にするためには、どうすればよいか？
5	大 曲	2	佐藤奈緒療	男	ゴミを減らすためにはどのようにしたらよいか？
6	大 曲	1	加藤遥	女	大仙市からごみのポイ捨てを減らすには、どうしたらよいか？
7	大 曲 西	1	山崎未夢	女	自然環境をより良くするためには、どのような工夫があるのか？また、環境に対してどのような取組をしているのか？
8	大 曲 南	2	沢野遥子	女	CO ₂ の排出を少なくするには、どのようなことをすればよいか？
9	大 曲 南	2	宮野希歩	女	水の無駄使いをなくすにはどうすればよいか？
10	平 和	2	佐々木彩乃	女	自然環境を保護するためにはどうするべきか？
11	西 仙 北	2	嵯峨麗夏	女	大仙市の豊かな環境を生かして、どのようなことができるだろうか？
12	西 仙 北	2	田口輝	男	日本の家の造りに必要なことは、何だろうか？
13	西 仙 北	2	寺山莉奈	女	身近な食材を使って作られる料理には、どんなものがあるのか？
14	中 仙	2	吉川康太	男	地産地消を活性化するにはどうすればよいか？
15	豊 成	2	相馬啓人	男	環境保護への取り組み方はどうあるべきか？
16	豊 成	2	高橋元気	男	地産地消を盛んにするにはどうすればよいか？
17	協 和	2	柳館沙耶	女	伝統的な文化を引き継いでいくためには、私たちにできることは何か？
18	南 外	2	鈴木竜也	男	分別、再利用などのゴミの処理をさらに進めていくためには、どうしたらよいか？
19	仙 北	2	大釜千佳	女	美しい自然を未来に受け継いでいくためには、どうしたらよいか？
20	太 田	2	加藤雅則	男	温暖化を食い止めるにはどうしたらよいか？

事前学習会の様子

[10月30日]



これから活動を共にしていく仲間との初顔合わせです。仲良くなれるかな？まだちょっと緊張しているようです。



ハンドサインを使っのゲームでコミュニケーションを図ります。ちゃんと伝わっているでしょうか。



アイビー先生から、オーストラリアについて教えてもらいます。「積極的に参加して！」の呼びかけに、皆意欲的。



オーストラリアの学生と、どんな交流ができるか、グループで考えます。全員参加でお互いに楽しめるものは？

「日本のダンスを見せたいから、ようかい体操なんかどうだろう？」という意見も出ていました。



[11月25日]



アイビー先生



ジョーダン先生



ナタリー先生



ステイシー先生



エリック先生

第2回学習会は英会話レッスンです。大仙市内に勤務する5名の先生方に教えていただきました。



4人ずつのグループに分かれて、先生方と英会話練習です。笑顔で話しかけてくれてとてもリラックスできました。「Good!」「Very close!」と励まされ、間違ってもチャレンジすることの大切さが実感できました。オーストラリアでもこんな調子でコミュニケーションできるといいな～。



実際にオーストラリアのお金を使って
買い物の練習をします。コインの大きさと金額は比例しないことを発見！



空港での入国審査の練習です。
“ Are you from Japan? ”
— “ Yes, I am. ”



予期せぬ質問にも笑顔で元気よく、
自分の知っている英語表現で切り抜けます。お見事！



税関での荷物検査。中から稲庭うどん
が出てきました。厳しく追及する係員に、
さあどうする？

[12月26日]

各課へのインタビュー



研究テーマに関わる大仙市の状況をリサーチしに、市役所各課へインタビューに出かけます。質問事項をチェックし、準備万端。



各課スタッフの皆さんも、わかりやすいように様々な資料を使って、丁寧に質問に答えてくれました。



身近で取り組まれていることでも知らないことがたくさんあり、勉強になります。



市の取組状況だけでなく、秋田県全体のことについても教えてもらいました。

結団式の様子



大仙市の中学生代表として、気持ちも新たに結団式に臨みます。



一人ずつ自己紹介と研究テーマの紹介をしました。少し緊張する瞬間です。



大曲中学校の佐藤さんと、仙北中学校の大釜さんが、派遣生代表のあいさつをしました。海外研修への意気込みが伝わってきます。



大仙市の将来を担う皆さんに期待を寄せている教育長です。
貴重な体験と学びのある研修になるよう、全員の安全と無事を願いながら激励していただきました。

ファームステイグループでの話合い



ファームステイ先ごとにグループになり、おみやげや文化紹介の相談をします。



「何を持って行こうか?」「みんなで何を紹介しようか?」和やかで楽しい時間です。



全員で話し合い、オーギーキッズとの交流活動を決めます。積極的に司会を務めてくれる生徒たち。



話し合いが盛り上がっています。
「アナ雪」の歌と「ようかい体操」に決まりました。

オーストラリア研修を終えて

No.1 大曲中学校 2年 伊藤 日向

1 はじめに

私は、1月3日から10日まで、日本と赤道をはさんで対象の位置にあるオーストラリアのケアンズに行ってきました。研究テーマを調べる事ももちろんですが、この研修で出会った友達と心から楽しみたいと思っていました。こうして過ごした8日間にオーストラリアで経験した多くの出来事はとても思い出に残り、これからの生活に役立っていくものとなりました。

2 応募した理由

私がこの海外派遣研修に応募した理由はたくさんありますが、一番の理由は、自分の英語力を確かめたかったからです。中学校に入って英語の授業が本格的に始まったといっても、その場で瞬時に英文を考えて相手と英語を話すという機会はほとんどありません。今、自分が外国人を相手にどのくらい英語を話して伝えることができるのかを確かめる良い機会だと思いました。

3 研究テーマ

「日本の伝統食を受け継いでいくためには、どうすべきか？」

私は秋田の郷土料理が大好きなので、その味がこれからも受け継がれていくようにするためにはどんなことをしていけばよいかを調べたいと思いました。また、秋田の料理を外国人に教えて、少しでも秋田という場所に興味をもってもらいたいと考えました。

1 事前に調べたこと

研修に出発する前に、市役所の方からお話を伺ったり、インターネットで調べたり、クラスでアンケートを取ったりしました。郷土料理のよさを発信するために、地域のお祭りや文化祭で料理を作って振る舞ったり、作り方の講習会を開いたりしていることが分かりました。

一方、郷土料理が家庭でどのくらい作られているかということについては、頻繁に作られているわけではないことが分かりました。

2 ファームステイのファミリーから聞いたこと

Q: オーストラリアには伝統食がありますか？

A: あります。ベジマイトやミートパイがあります。

Q: 子供たちは学校から帰って料理を作ることがありますか？

A: ありません。食事は、親が作ります。

Q: 伝統食を守っていくためにしていることはありますか？



人気料理「フィッシュ&チップス」

A: 伝統食を家庭料理として時々食べています

Q: オーストラリアにはどれ位多くの伝統食がありますか？

A: オーストラリアには様々な国からの移民がいるので、数え切れない程の伝統食があります。

3 日本とオーストラリアを比較しての、オーストラリアのよさ

① ワンプレート式の食事

- ・一つの大きなプレートに色々な種類のおかずがのっている。そうすることで洗い物が少なくて済む。
- ・右の写真はある日の昼食。ソーセージと玉ねぎの炒め物、キャベツとアーモンドを砂糖で和えたもの。



ワンプレート式の昼食

② 自給自足

私がファームステイした**Voss**さんの家では、基本的に自分たちが育てた野菜や果物を使って調理していました。スーパーに行って買い物をするのはほとんどないそうです。

～考察～

ファームステイ先でのインタビューにもあったように、オーストラリアにはたくさんの移民がいます。そのためにたくさんの国の料理、伝統食があります。その料理を受け継いでいくために週1回ほど伝統食を食べているそうです。そして何よりも、自分で育てた食材で作る家庭料理に誇りをもっていました。

私のクラスで調べたところ、伝統食を家庭料理として食べている回数は、オーストラリアほど多くはありませんでした。秋田の伝統食を継承していくためには、秋田で捕れる魚、育てている家畜や作物を使って、秋田の味を各家庭で作っていくことが大切だと思いました。また、レシピなどの情報発信も必要ですが、秋田にしかない料理に誇りを持ち、次の世代へ受け継いでいくことが大切だと思いました。

4 エピソード

1 ファームステイ

私はvossさんという方のお宅にファームステイしました。夫婦二人暮らしで、その他にインコが6羽と犬が2匹いました。最初に会った時は、緊張して思うように話せませんでしたが、とてもフレンドリーで、

「Nice to meet you. Welcome to our house.

Please call me Mama. He is Papa.」

(初めまして。私たちの家へようこそ。私をママと呼んでください。彼はパパ。) と言って出迎えてくれました。



Papa&Mamaと一緒に

Papaは牧場や有名な滝、アメジストが売られている店などに連れて行ってくれました。Mamaとは、毎晩ボードゲームをしたりショッピングに行ったりしました。Mamaには、「あなたたちはショッピングが大好きね。」と笑われました。

右の写真は私たちが作った夕食です。そうめんを作ったらとても美味しそうに食べてくれたので嬉しかったです。Mamaがボードゲームをしながら、私たちがこのファームステイで食べていた肉類は、全部Papaが加工して作ったものだと教えてくれました。飼っている牛を自分たちで食肉用に加工するのだと教えてもらい、とても驚いたのと同時に、これこそがまさに自給自足だと思いました。



私たちが作ったそうめん

食事は肉がメインで少し量が多かったのですがおいしかったです。お茶の時間には、色々な種類のケーキとコーヒーをいただきました。食後には水深2メートルの室内プールで泳ぎ、それも楽しかったです。ステイ先を出発する時に手紙を渡したら、二人ともとても喜んでくれました。

2 オージーキッズとの交流

マンガリーフォールズにあるロッジでオージーキッズ（現地の子供たち）と交流しました。

オージーキッズはとてもフレンドリーかつ積極的で、可愛い子もたくさんいました。私はこの交流で、一人の男の子と、とても仲良くなりました。少しの時間しか遊ぶことができなかったけれど、ずっと前から友達だったかのように話してくれました。お別れするときに「**You are my best friend. See you later.**」と言ってくれてとても嬉しかったと同時に、外国で初めて友達ができたということは、忘れることのない一番の思い出です。



仲良くなったオージーキッズ

3 アボリジニとミコマスケイ

アボリジニとは、オーストラリア北部に住む先住民族で、様々な部族から成ります。私たちが見たアボリジニショーでは、子どもから大人まで、体に色々な模様を描いて踊っていました。6万年も昔からある踊りを今まで継承してきたところが、凄いと思いました。

次にミコマスケイです。右の写真はグレートバリアリーフと呼ばれる海です。エメラルドブルーのとても綺麗な色をしていました。砂浜に着くとロープが張られていて、その内側にたくさんの鳥がいました。鳥の生息地に人間が入らないようにするための囲いだそうです。自然環境はもちろんのこと、生き物もとても大切にしているのだと思いました。

海に入って泳いでみると、目の前を魚の群れが通過して行って驚きました。こんなにも近くで、しかも海の中で魚を見たことがない私にとっては、とても貴重な体験になりました。



グレートバリアリーフの青い海

4 海外で働く日本人

今回の研修では、現地で働く日本人の方にインタビューする機会がたくさんありました。その中でも、特に印象に残った原田さんのインタビューを紹介します。

Q: オーストラリアに何年住んでいますか？また、オーストラリアに来ようと思った理由は何ですか？

A: 3年間住んでいます。

ここに来ようと思った理由は、前から海外に憧れをもっていたのと、環境を変えて生活したかったからです。

Q: オーストラリアに来て大変だった事は何ですか？

A: 何でも声に出して言わなければならないことです。→言わないと相手が分かってくれない。

Q: どうやってコミュニケーションを取っていますか？

A: 自分も相手も知っている共通の話題を話すことです。そうすると相手も自分も楽しくなります。

Q: 新たに取り組んでみたいことはありますか？

A: あります。日本の歴史をオーギーに教えてみたいです。日本好きのオーギーに会えるからです。

～インタビューから考えた事～

原田さんが話してくれた、『言わないと相手が分かってくれない。』ということに共感しました。

私自身、ファームステイ先やお店に行って何も話せないで苦勞したことが、この研修中に何度もあったからです。現地の人は思ったことを包み隠さず言ってくれます。私もそのように、思ったことを率直に言えるような人になりたいと思いました。

7 最後に

この研修で初めて知ったことや驚いたことはたくさんありました。また、初めて海外に出かけて、現地の英語や人々にふれることもできました。

オーストラリアは自然が豊かで、朝起きると必ず鳥のさえずりが聞こえてくるなど、とてもゆったりした時間の流れを感じました。今思い返しても、楽しく、おもしろい出来事ばかりでした。私の今回の研究テーマは伝統食でしたが、それを支える地産地消や自給自足への意識がとても高いオーストラリアに比べ、秋田は人々の意識が少し低いと思いました。大仙市ではスーパーや道の駅などでも、地産地消コーナーが設けられています。これからは、私も意識して立ち寄り、そのような所でできるだけ購入したいと思います。

今回、海外に出かけたことで、自分の英語に少し自信がついたような気がします。私は英語が好きなので、これからも自分の英語力を磨き、オーストラリアだけでなく、まだ行ったことのない国へも行き、もっとたくさんのことを学びたいと思います。

現地や今回の研修でできた新しい友達と作った思い出を忘れません。そして今回、この研修に参加できたことを誇りに思っています。素晴らしい体験をさせていただきありがとうございました。

Australia report

No.2 大曲中学校 2年 佐々木 朱莉

I はじめに

私は、小学生の頃から英語が好きでした。中学生になり、海外派遣研修のことを知り、生の英語を体験してコミュニケーション能力を高め、将来に生かしたいと思ってこの研修に応募しました。参加が決まった時は、嬉しい気持ちと同時に不安もこみあげてきましたが、事前学習会を受けてオーストラリアのことを知っていくうちに楽しみになりました。世界自然遺産や海外での生活を実際に見たり、聞いたり、触れたりしてきたいと思いました。

II 研究テーマ

「地球に優しい環境をつくるために、私たちに何ができるだろうか？」

私がこの研究テーマにした理由は、今、地球が温暖化傾向になってきているからです。地球温暖化は、二酸化炭素などの空気中の温室効果ガス濃度が増えてきたために、地表付近の気温が徐々に上昇することで様々な形で私達の暮らしに影響を与えます。例えば、農作物の収穫量が変わったり、水不足を深刻化させる可能性もあります。その問題を少しでも改善するために、一人一人が身近なことに気を配ることが大切だと思ったからです。

III 研究方法 / 調べた内容

1 研究方法

- ① 大仙市の環境に対する取組について事前に調べる
 - ② ケアンズの環境に対する取組について現地で調べる
- ①、②について比較しました。

2 調べた内容

① 大仙市の環境に対する取組

大仙市では

- 環境への負荷の少ない循環型社会をめざした町
- 自然と調和した安らぎと潤いのある町
- 環境について考え、実践する町

の三つのことについて取り組んでいます。

※ 循環型社会とは、有限である資源を効率的に利用するとともに、再生産を行って持続可能な形で循環させながら利用していく社会のことをいいます。限られた資源を大切にすることや、自然を大切にして環境に優しい町の一員になるために何ができるのか、オーストラリアの生活から学びたいと思いました。

② ケアズ環境に関する取組

ファームステイ先のカーヒルさん宅では、地球温暖化による水不足の対策として、シャワーを4分以内で済ませるといった決まりがありました。また、(写真①)のようになっていますが、水の無駄使いを防ぐために、バスタブに、お湯をためてつかるといったことはありませんでした。

写真①



また、(写真②)のような皿を洗うブラシがありました。水の無駄使いを防ぐために、中に水と洗剤を入れて使うブラシでした。流し台には、水を貯めることが出来るように排水溝の蓋がついていました。

写真②



ケアズは、自然の中にできた都市なので、木がたくさんありました(写真③)。木は、二酸化炭素を取り入れ酸素をだしているのです。環境にやさしい都市になっています。

写真③-1



写真③-2



ケアズ市内を掃除する機械(写真④)がありました。また、お店などが並んでいる所には、ほぼ一定の間隔で、ゴミ箱(写真⑤)が置かれていました。

写真④



写真⑤



3 考察

オーストラリアは大きな国土の割に居住地が少なく、特に中心部に行くほど砂漠が広がり、それが年々拡大しています。また、海面の水位上昇もあり地球温暖化が深刻な問題となっています。

さらに、地球温暖化の影響によって降水量が減り、水不足に悩まされています。その対策として各家庭では、先に述べた様な節水対策が行われていますが、敷地内に雨水を貯めて生活用水として使う為の貯水タンクが設置されている家庭が多く、このような日本との違いからも、オーストラリアの人々は、洗濯、食器洗い、シャワー、入浴の際の節水意識が高いと思いました。

また、オーストラリアでも、日本と同じ様にゴミの分別が行われています。ステイ先では、大まかに、通常ゴミ、リサイクルゴミ（紙類、プラスチック類、アルミ&スチール缶、ガラス類）の2種類にしか分かれていませんでした。一方、日本では、燃やせるゴミ、燃やせないゴミ（陶器類、ガラス類、小型家電類、その他）、資源ゴミ（ビン、缶、ペットボトル、古紙、古布類）に分かれています。このことから、日本とオーストラリアの分別の仕方を比較すると、日本の方がかなり細かく分かれていることがわかりました。ゴミの分別は、ゴミの減少や再利用、再資源化につながり、地球温暖化対策になります。

私は、オーストラリア（ケアンズ周辺）の現状を見て、地球温暖化に対する意識が高まりました。身近なことに目を向けて、小さなことでも気を配ることが、地球環境を少しでも改善することにつながると思いました。

IV エピソード

1 ファームステイ先の出来事

～カーヒルさん一家の紹介～

パパ・・・・・・・・ワレンさん

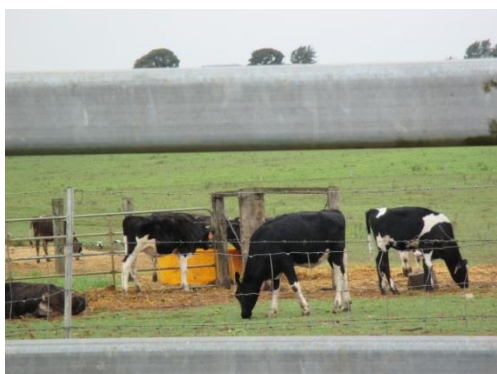
ママ・・・・・・・・アンさん

犬・・・・・・・・ジェダー

猫・・・・・・・・名まえは不明

(1日目)

カーヒルさんの農場を見学したり、家畜を見に行ったりしました。カーヒルさんの農場はとても広くて驚きました。放牧された牛や豚、馬、鳥などのたくさんの家畜を間近で見ることができたので、貴重な体験になりました。ただ、とても匂いが強く大変でした。



放牧されている牛



放し飼いの鳥

(2日目)

前日にカーヒルさん宅に来たお客さんとワレンさん、アンさんと共に、朝、森に行きました。道がでこぼこしていて、歩くのが大変でした。美しい自然を見ながら、お客さんともコミュニケーションをとることができて、とても楽しい時間を過ごしました。

その後で、ワレンさんとアンさんとドライブに行きました。博物館や大きな湖、カーテンフィグツリーを見に行きました。帰りに車から眺めると、辺り一面が草原で、たくさんの牛や馬が放牧されているのに大変驚きました。



カーテンフィグツリー



博物館 (ツリーカンガルー)



ファームステイの仲間と

(3日目)

早くもファームステイ最終日になりました。

私たちからホストファミリーへのプレゼントとして、そうめんを作り、五十羽の折り鶴と一緒にプレゼントしました。また、個人的に、福笑いとサイコロを渡しました。どちらもとても喜んでくれたので嬉しく思いました。ワレンさんとアンさんはとても優しく親切な方で、お陰で楽しいファームステイ生活を送ることができました。

ホストファミリーの皆さん本当にありがとうございました !!



ワレンさん、アンさんと一緒に (左写真)

2 オージーキッズとの交流

オージーキッズは、私たちよりも年下の子供たちでした。障害物レースでは、3グループに分かれて競い合いました。みんなで協力して壁を乗り越えたり、いかだを作って沼を往復するタイムを競ったりしました。とても楽しかったです。夜にはバーベキューやダンスをしました。私たちからは、アナと雪の女王とようかい体操の歌と踊りをプレゼントしました。オージーキッズがとても喜んでくれたので、嬉しかったです。この交流では、オージーキッズとたくさんコミュニケーションをとることができて、英語が伝わる嬉しさを改めて感じることができました。

また、土ボタルも鑑賞しました。道が悪く歩くのが大変でしたが、土ボタルはとてもきれいで、感動しました。



オージーキッズと一緒に

3 海外で活躍している日本人にインタビューしました

Q どのようにコミュニケーションをとっていますか？

- A
- ・あいさつを大切にします。
 - ・自己紹介からコミュニケーションをとっている。
 - ・目を見て笑顔で話す。

Q どうしたら英語を話せるようになりますか？

- A
- ・文法早読み表などを作って、自分で勉強した。
 - ・CDや本を使って、何回も聞いたり読んだりした。
 - ・音楽を聴いて覚える。
 - ・単語を少しずつ勉強する。
 - ・自分の好きな外国の映画を見て、理解できるようになるまで自分で勉強する。
 - ・色々な英語にふれてみる。

《感想》

私は、自分から進んで英語でコミュニケーションをとるのがあまり得意ではないので、これらのアドバイスを取り入れて学んでいきたいと思います。また、英語の勉強方法をなかなか見つけることができずにいましたが、参考にしたいと思いました。

4 世界遺産はすごかった！

キュランダ村に行く時に、世界遺産の森を巡っていく列車に乗ったり、グレートバリアリーフでシュノーケリングを体験したりしてきました。



キュランダ溪谷鉄道



列車内にて



グレートバリアリーフ

V 海外研修を終えて

私は初めて海外に行って、とても貴重な体験ができました。

はじめはホストファミリーに自分の英語が伝わるかとても不安でしたが、ステイ先での生活を通して、笑顔でコミュニケーションをとることが大切だと分かりました。例えば、日本の料理を作って食べてもらおうとそうめんを作った時に、盛る皿を貸してもらわなくてはいけませんでした。しかし、皿の大きさを説明するのがとても難しかったので、私は絵に描いて説明しました。ホストマザーは「OK」と言って分かってくれ、自分の気持ちが伝わったことが本当に嬉しかったです。コミュニケーションは笑顔が大切だということが実感できました。笑顔で話すことで、相手と楽しく会話をすることができました。

この研修で学んだことを将来に生かしていきたいと思います。そして、またいつかオーストラリアに行きたいです。

Thank You !!

オーストラリアレポート

No.3 大曲中学校 2年 佐々木 央理

I はじめに

私が、この研修に参加した理由は、自分の英語力を試すためです。以前から英語が好きで、積極的にイングリッシュキャンプに参加して英会話を学びました。また、オーストラリアの自然や動物に興味があり、実際に見てみたいと思いましたし、アボリジニ族の文化も知りたいと思っていました。常に英語を使わなければならない環境を体験したい、ファームステイをしてみたい、このような思いで、この研修に参加しました。

II 研究テーマと設定の理由

私は「自然環境と水資源を大切にするために、家庭では何をすべきか？」という研究テーマを考えました。

今、世界では地球温暖化が大きな課題となっています。そこで、オーストラリアではどのような取組をしているのか。そのことを大仙市と比較して考えるために、大仙市役所の方に質問しました。大仙市では、「子どもエコチャレンジ」という取組の中で、家庭生活のなかで排出される二酸化炭素の量を把握し、削減を促しています。この取組を、省エネや地球温暖化について考えるきっかけとして、チャレンジシートの配布をしています。私も、毎年家族と一緒に取り組んでいます。オーストラリアでは、一体どんなことをしているのだろうと関心が高まりました。

III 研究方法と調べた内容

① 研究方法

ファームステイ先や、ロッジのスタッフの人たちにインタビューをして情報を入手しました。

② 調べた内容

オーストラリアの各家庭では、貯水タンクが備えられていました。タンクについて、ロッジの方に質問をしました。雨水を溜めて、バクテリア分解をしてから使用するそうです。僕が見たタンクは、高さが3メートルほどもある大きなものでした。

雨水をタンクに溜めて使うようになっているため、雨が降らないと大変なのだそうです。オーストラリアは国土の面積が日本の21倍もあるため、水道管を張りめぐらせませ

ん。だから、日本のような水道局と呼ばれるところはありません。各家庭独自で水を用意しないとイケないそうです。

僕が行った時は、雨が降っていましたが、それまではずっと干ばつが続いていたそうです。



【ロッジの貯水タンク】

蛇口から出る水は、飲み水としては使用できず、買った水を飲んでいました。僕が買った水は、600 ミリリットルで 300 円ぐらいする高いものでした。高価にすることで、水を大事なものだと感じられるようにしているのでしょうか。オーストラリアの人は当たり前前に高い値段の水を買っていました。

家庭では、毎日洗濯することはなく、シャワーの使用も時間制限を設けるなどして、節水を心掛けていました。

下の写真は、男性用トイレです。日本のように個別のトイレになっていませんでした。共同で使うことで、節水することができます。



【節水型の男性用トイレ】

ファームステイ先にエアコンはなく、窓や玄関をずっと開けていました。料理も、電力を使用して時間をかけてつくるものよりは、パンやシリアルのような簡易な食事を主にしていました。



【ステイ先での朝食】



【ステイ先での昼食】

③ 考察

オーストラリアの人々は、水や電気の使い方や自然に対する意識が高いことが分かりました。日常生活の中の、食事、洗濯、トイレ、お風呂など、一つ一つに節水節電の意識をもっていることを感じました。私たち日本人は、便利な生活を当たり前と思い、水も電気も使いたいように使用しており、意識の低さを感じました。毎年行っている「エコチャレンジ」の時だけではなく、恵まれた環境に感謝しながらも、もっと節水節電を意識して生活しなければならないと思いました。

IV エピソード

<ファームステイ>

ファームステイではロス家に滞在しました。パパのグランさん、ママのスーさん、娘のクリスタルさん（18歳）、息子のダニエルさん（16歳）の4人家族です。

グランさんは、アボリジニの笛（ディジュリドゥ）の吹き方を教えてくれました。スーさんは、風力発電の風車が立っている Windy Hill という丘や、カーテンフィグツリーという珍しい木を見に連れて行ってくれました。

【Windy Hill】



【カーテンフィグツリー】

クリスタルさんには、ミラミラフォールズという有名な滝を見に連れて行ってもらいました。ダニエルさんは、私たちと一緒にジェンガや UNO で遊んでくれました。

<オージーキッズとの交流>

私たち派遣生は、全員で今日本で人気の、「ようかい体操第一」と「アナと雪の女王」の曲を歌いました。オージーキッズたちは、伝統的な踊りを披露してくれました。また、混合のチームを組んで、野外で筏（いかだ）作り競争をして楽しみました。彼らはとても親しみやすく、すぐ友達になることができました。

<土ポタル鑑賞>

日本の蛍とは違い、ミミズのような生き物です。成長するとハエになるそうです。その光が、青白く見える人は「人間の目」をもち、緑色に見える人は「野生の目」をもつと言

われています。僕には緑色に見えました。

<キュランダ溪谷>

キュランダ溪谷鉄道に乗ってキュランダ村へ行きました。そこでは、水陸両用車アーミーダックに乗ったり、アボリジニのショーを見たりすることができました。アボリジニの人々が使うブーメラン投げも体験しましたが、思っていたよりも上手に投げることができました。



【キュランダ溪谷鉄道】



【アボリジニショー】

<ミコマスケイ>

サンゴの死骸の砂で出来た砂州です。島の90%を鳥が占めています。鳥に危害を加えないようにするために柵が設けられています。海は透明度が高くとてもきれいでした。シュノーケルと足ひれを付けて、グレートバリアリーフでシュノーケリングをしました。きれいなサンゴや見たことのないくらいの大きな魚がたくさんいました。



【船で移動】



【ミコマスケイ】

<海外で活躍する日本人にインタビュー>

- ・OKギフトショップ営業部の原田さん
- ・日本旅行ケアンズ支店長の黒田さん
- ・ケアンズ市内のレストランウエイターの小島さん

Q. なぜオーストラリアで仕事をしているのか。

A. 3人同じく、海外への憧れがあったことと、仕事の環境を変えるため。

Q. オーストラリアでのコミュニケーションのコツは。

A. 分からなくても、分かるふりをしないできちんと聞き返す。

共通の話題を積極的に話しかける。

Q. オーストラリアで働いていて大変だったことは何か。

A. 時間にアバウトな人がいること。

インタビューを終えて、恥ずかしがらずに相手と会話し、コミュニケーション能力を高めることが大切だと思いました。色々と苦労話を聞きましたが、それも自分の夢を叶えるためには、我慢して克服しなければならないことなのだと感じました。

V 海外研修を終えて

研修中の9日間はあっという間でした。初日から最終日まで、ずっと楽しかったです。ファームステイを体験したことで、オーストラリアと日本の生活の違いも知ることができました。例えば、食生活では米をほとんど食べず、シリアルやパンが主食でした。見たことがないほどの大きなタンクがたくさんあり、オーストラリアの人がとても水を大切にしていることも実感できました。

また、色々なところに行って、オーストラリアの大自然を感じることもできました。目の前に広がる、木々の緑や滝のスケールが日本とはまるで違い、圧倒されました。

そして、この研修で、僕は英語でのコミュニケーションの難しさを感じました。ファームステイ先で僕たちのためにゆっくりと話してくれる時は意味を理解できましたが、家族間で話している会話は速くて、聞き取ることができませんでした。しかし、自分の英語が通じたときは、英語で会話する面白さも同時に感じました。今度はもっと英語力を付けて、今回ステイ先でお世話になったことへのお礼も兼ねて、またオーストラリアに行きたいです。

ファームステイをさせていただいたロス家の皆さん、そして、私たちの海外研修を支えてくださった皆さん、私の家族に大変感謝しています。ありがとうございました。

オーストラリアレポート

No. 4 大曲中学校 2年 佐藤 泉

I はじめに・・・

私がこの海外派遣研修に参加しようと思ったのは、今まで海外へ行ったことがないので、オーストラリアで生きた英語に触れてみたいという強い思いと、海外で自分の英語がどれだけ通用するのか試してみたいと思ったからです。そして、将来を担う私たちが海外で異文化を学び、海外と日本の文化の共通点、相違点に気付くことで、大仙市の活性化のためにできることがあるのではないかと考えたことも理由の一つです。

初めての海外ということで、出発前は不安なところもありましたが、オーストラリアに着いた瞬間から、楽しみだという気持ちの方が強くなりました。

II 私の研究テーマ

私の研究テーマは、「**地産地消を活発にするためには、どうすればよいか?**」です。

この研究テーマを設定したのは、日本の食料自給率が低く、輸入食材が多いからです。そして、オーストラリアは世界の中でも、特に食料自給率が高いため、参考になる点がたくさん見つけられると思ったからです。

III 研究の方法と調べた内容

1 大仙市の地産地消について

オーストラリアへの出発前に大仙市役所へ行き、農林商工部農林振興課の方に、大仙市で現在行われている地産地消を進めるための工夫についての様々な資料をいただき、お話も聞いてきました。次のような工夫がされていることが分かりました。

- ① 利用客が多い農産物直売所や加工所への支援
集客や販売額向上のためのアドバイスを講師の方から学ぶ。
- ② 地元のスーパーなどと協力し、店の一部を借りて『地産地消コーナー』を設けて販売
- ③ 学校給食での地産地消
- ④ 首都圏からの農業体験の受け入れ
- ⑤ 国や県と連携して、6次産業への取り組みを推進 など

私は②の『地産地消コーナー』が気になり、「人気はどうなのか」を詳しく聞いてみると、消費者は安心安全な県内産や国内産を求める傾向にある点や、顔写真付きの値札を置くことで誰が作っているものなのか分かる点から、人気だということでした。さらに、③の学校給食に出てくる米や米粉類は大仙市産だそうです。ここで、一つ疑問に思うことがありました。「こんなにたくさんの地産地消を進めるための取組を行っているのに、なぜ食料自給率が低

いのか？」ということです。

2 オーストラリアで見聞した地産地消について

オーストラリアへ行き、ホストファミリーに地産地消について質問してみました。

Q：ここではどのような地産地消を行っていますか？

A：「ミルク、バター、クリーム、ヨーグルト、チーズは全てここで育った牛で作られている。夕食に食べるチキンやビーフは papa が育てたもの。それに papa たちファーマーがカットもして、スーパーで売ってもらっている。スーパーでお肉を見ると、いつも、papa の顔が浮かんでくる。卵も家で育てているニワトリからとれたもの。私たちは毎朝、新鮮なものを食べることができる (mama)。」



「新鮮な卵やチーズ」

オーストラリアのスーパーで食材を見ていると、ほとんどがオーストラリア産で驚きました。

スーパーを見ても消費者の声を聞いても、「地元のもの」という気持ちが伝わってきました。最終日に行った金・土・日曜日限定のマーケットでは、ものすごい量の野菜やフルーツがずらりと並んでいました。それもすべて日本では考えられないほど価格が安いのです。日本とは違い、広大な農地で大量に作る事ができ、生活のほとんどを自給自足でまかなっている、オーストラリアだからこそできる安さなのかなと思いました。



「地元で採れた野菜やフルーツ」

IV 研究のまとめ

ホストファミリーの家で行っている地産地消は、さすがに秋田では真似できませんが、「秋田で作ったものを、秋田で買う」ということであれば、簡単にできそうです。自分は今までスーパーなどで、安全安心のために外国産はなるべく避けていました。しかし、地産地消コーナーで買おうという意識はなかったと思います。これからは、なるべく地産地消コーナーを利用したり、生産地はどこなのか確認したりしてから買うことを意識したいと思います。私たち一人一人の意識で日本の地産地消も活発になり、食料自給率も変わってくると思います。食料自給率が高いオーストラリアだからこそ学べる点、参考になる点があり、とても勉強になりました。

V ファームステイで・・・

私たちのグループがお世話になったのは Voss さんです。

ファミリーはホストファザー (papa) とホストマザー (mama) の二人で、とても優しくかったです。

1 美味しいご飯

ファームステイ先では、美味しいご飯をたくさん食べさせてもらいました。

「朝ご飯」



「昼ご飯」



「おやつ」



「夜ご飯」



ご飯の時は papa がいつも「いただきます」「ごちそうさま」を日本語で言ってくれました。おやつは毎日 mama の手作りのケーキで、とても美味しかったです。

2 ショッピング!!!

ホストファミリーの papa と mama は色々なお店に連れて行ってってくれました。

アメジストショップやギフトショップ、洋服店、スーパーなど、オーストラリアのお店をたくさん紹介してくれました。アメジスト店では、日本とは違って値段が安く、簡単に手に入られるということに驚きました。そして、とてもキレイでした。

3 家は・・・

この家に到着した時から「すごい!」という言葉の連発でした。右の写真は私たちの部屋ですが、あまりの可愛らしさに見た瞬間びっくりしました!さらに、家には室内プールがあり、深さが2メートルもありました。畑には野菜やフルーツがたくさん植えてあり、それらも家で食べるそうです。また、鳥もたくさん飼っていて、お話する鳥が特に可愛かったです。夕食の時に、papa がデイジーというこの鳥を、食卓に連れてきたので少し怖かったです。でも、このような鳥を間近で見るとはあまりないので、良い経験になりました。



「ステイ先で泊まった部屋」

4 お別れ

最終日にグループの皆で感謝の気持ちを込めて、papa と mama に手紙を書きました。初めてのファームステイで、分からないことも、心配なことも、たくさんありましたが、papa と mama が優しく接してくれて、とても有意義な時間になりました。また、二人は私たちそれぞれに、クマのぬいぐるみやブレスレットなどをプレゼントしてくれました。最後に二人にハグされた時には、お別れしたくないなあと心から思いました。オーストラリアにpapa と mama ができたことは、私にとって忘れることのできない一生の宝物になりました。



「papa&mamaと私たち」

VI 海外で活躍する日本人

この研修では海外で活躍する日本人の方々のお話を聞く機会がたくさんありました。

その中でも一番印象に残った、現地のレストランで働く小島さんのインタビューの一部を紹介します。

Q： コミュニケーション能力・英語力を上げるためにはどうすれば良いですか？

A： 「怖がらないこと。つたない英語でも伝わる。日本の友達がこちらにいても、外国人の友達をご飯などに誘うようにした。家では、英語でドラマを見た。そして次の日に、ドラマの中に出てきた英語を職場で使ってみた。」

Q： なぜ、オーストラリアに来たのですか？

A： 「以前から、英語を話してみたいと思っていたから。」

Q： 仕事を始めた頃はどんな感じでしたか？

A： 「英語がお客さんに伝わらなかったのが、苦労した。」

Q： 日本に帰りたと思いますか？

A： 「1年中思う。」

Q： ここに来てよかったと思うことはありますか？

A： 「お店に来た日本人のお客様のサポートをして、“あなたが居てくれて良かった”と言われたこと。あとは、**日本のよさを再確認できたこと**。オーストラリアは時間がざっくりしている。例えば、バスが時間どおりに来ないとか。日本はオーストラリアに比べて色々なことが便利。」

小島さんのほかにも、たくさんの方々のお話を聞いて、共通点を見つけました。それは、最初は皆英語が話せなかったということです。でも、そこで諦めないで、自分なりの工夫で英語を勉強した結果、話せるようになったことも皆さん同じでした。文化も言葉も違う国に来て、生活している日本人の方々には格好良かったです。

VII オーストラリア研修を終えて・・・

今回の海外派遣では、初めての体験をたくさんさせていただきました。出発前の結団式で派遣生徒代表で誓いの言葉を述べたとき、私は“アイコンタクト”を大切にしたい、と発表しました。現地ではこのことを心がけて頑張りました。**アイコンタクトと私のつたない英語でもオーストラリアの人々が理解してくれた**ことが本当に嬉しかったです。

また、自分の研究テーマをもったことで、ただ楽しむだけでなく、視点をもってオーストラリアを楽しむこともできました。今回、発見したことを生かしていける場はたくさんあると思うので、自分から発信していけたらと思っています。

秋田に帰って来て、オーストラリアでの生活と比べてみると、今まで当たり前と思っていたことが、「便利だな」とか「いいな」と感じられるようになり、秋田のよさを改めて理解できました。海外へ行くという体験は、自分にとって、将来へとつながるとても良い経験になったと思います。このような機会を与えてくださったことに心から感謝しています。ありがとうございました。



オーストラリアレポート

No.5 大曲中学校 2年 佐藤 奈緒燦

I はじめに

私は、小学校の時に初めて英語に触れました。塾で勉強を進めていくにつれて英語が楽しくなり、中学校でも英語の授業が楽しみになりました。ALTの先生と会話をしてみて、今の自分の英語力で、どれ位英語圏の人たちと会話ができるか、海外に行って試したいと思うようになりました。また、姉もこの海外研修に参加していて、「英会話の勉強になったし、何よりオーストラリアは自然が素晴らしい国だ」と話していたのを聞いて、ますます海外研修に参加して、色々な経験をしてみたいと思うようになりました。

II 研究テーマと設定の理由

テーマ：「ゴミを減らすためにはどのようにしたらよいのか？」

ニュースや新聞などで、大気汚染や地球温暖化など、環境破壊に関する話題は絶えません。環境を守る取組として、今、自分にできることはないかと考えた時、ゴミを減らすことならできるのではないかと考えました。

大仙市内にある地域ごとの年間ゴミ排出量を調べてみると、ワースト2位が自分の住んでいる大曲地域であることが分かりました。研修先のオーストラリアは、入国時の植物などの持ち込み制限が厳しく、広大な自然や国立公園などの環境資源を守るきまりもたくさんあり、自然環境保護に関して熱心に取り組まれています。きっとゴミに対しても、独自の取り組み方や工夫があるのではないかと思います。

オーストラリアのゴミ排出の現状を知り、大仙市と比較することで、大仙市のゴミの減少のために私たちができることがあるのではないかと思います、このテーマを設定しました。

III 調査方法

- 1 事前学習会で、市役所の担当職員に、大仙市のゴミに関することについてインタビューし、知識を得る。
- 2 大仙市の現状を知った上で、ホストファミリーに質問する内容を考え、質問してくる。

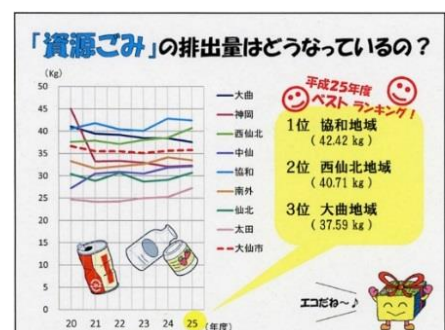
IV 結果

1 大仙市の現状

大仙市では、月ごとに古紙や古着などの資源ゴミを回収する取組をしていました。

平成25年度資源ゴミの量をベストランキングで見ると、

- 1位 協和地域 (42.42kg)
- 2位 西仙北地域 (40.71kg)
- 3位 大曲地域 (37.59kg)



一人当たりの資源ゴミの排出量

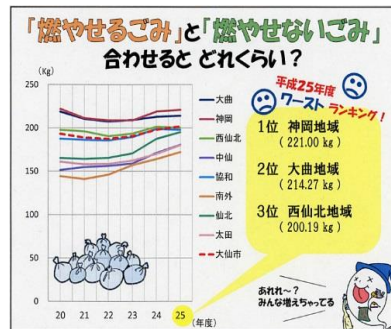
でした。

しかし、大仙市の1人あたり年間のゴミの排出量を見ると、減るどころか年々増加していることがわかりました。

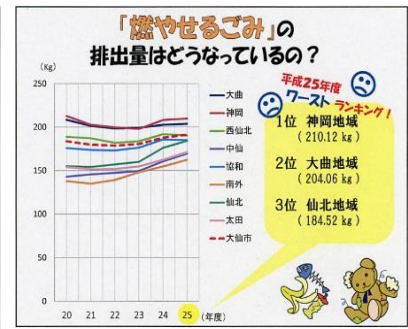
平成25年度燃やせるゴミの排出量をワーストランキングで見ると、

- 1位 神岡地域 (210.12kg)
- 2位 大曲地域 (204.06kg)
- 3位 仙北地域 (184.52kg)

でした。



一人当たりのゴミの排出量



一人当たりの燃やせるゴミの排出量

2. ホストファミリーにアンケート用紙を作ってゴミについて質問をした結果

Q 1 : How much garbage do you produce for 1 year? (1年間にどのくらいゴミが出ますか?)

A 1 : Half a ton garbage. (1 tの半分はゴミです。)

Half a ton re-cycle. (Material) (残り半分がリサイクルできるものです。)

Q 2 : What do you do to decrease the garbage?

(ゴミを減らすためにどのようなことをしていますか?)

A 2 : All food scraps given to chickens. (vegetables)
(残飯(野菜)をすべてニワトリに与えて処理しています。)

All meat scraps given to dogs.
(残った肉はすべて犬に与えて処理しています。)

Q 3 : What do you recycle in Australia?

(オーストラリアでは何をリサイクルしていますか?)

A 3 : Plastics, Glass, Cardboards, Tires, Papers.
(プラスチック、ガラス、段ボール、タイヤ、紙です。)

このアンケートは、自分で調べたり、姉に聞いたりして作りました。大変忙しい中、ホストファミリーの方はとても丁寧に答えてくれました。



左:リサイクルできるゴミ 右:生ゴミ

V まとめ

オーストラリアに行ってまず最初に感激したのが広大な緑です。道端にはゴミひとつなく、見渡す限りサトウキビ畑と森だけでした。私は、この緑があるのは、オーストラリアの人たちが自然に気を遣って生活をしているからだと思いました。

ファームステイ先では、生ゴミをニワトリの餌にしたり、食べ残した肉を犬の餌にしたりしていました。また、リサイクル可能な缶、ビンなどは分別し、リサイクルに出していました。リサイクルに関しては、自分の住んでいる大仙市と同じような取組をしていると思いました。

自分の住んでいる大曲地区では、平成20年から22年にかけて減っていたゴミが、22年から25年にかけてまた増加しています。私たちが、今すぐにできることの一つは、生ゴミを減らすことだと思います。例えば、好き嫌いをせずに出された食べ物を全部食べることや、無駄のないように食べきれぬ量だけを調理することで、無理なく生ゴミを減らしていけることをオーストラリアで学んできました。



オーストラリアの広大な緑

また、大仙市ではさまざまな資源ゴミの回収が行われています。事前学習をすることで、古着の回収をしていることも知りました。知らないでいると古着も燃えるゴミとなってしまう。より多くの方が資源ゴミの回収内容を正確に知ること、ゴミの減少につながるのではないかと思います。毎月発行される大仙市の広報には、様々な市のお知らせや、ゴミについても記載されているので、大仙市民としてしっかりと目を通していきたいです。大曲中学校でもアルミ缶、プルタブ、ペットボトルキャップ、古紙の回収を行っています。普段から、学校でも家庭でも、積極的に資源ゴミの回収に協力し、ゴミの減少につながるようにしていきたいと思いました。

VI オーストラリアで過ごした9日間

1 初日のアクシデント

成田発の飛行機が欠航になり、オーストラリアに出発する日が1日延びてしまいました。その分成田に一泊して成田山に行ったり、宿泊したホテル内の見学ツアーをしたりしました。そして、その日の夜には、無事にオーストラリアに出発できました。



成田山に初詣

2 ファームステイ先で



ファームステイ先の牛たち

ファームステイ先では、主に牛を飼っており、それ以外に馬1頭、犬3匹、猫1匹、ニワトリ4羽もいました。ファームステイ中に、牛に注射している様子を見学しました。この注射は子供を産まないようにするためにするのだそうです。

トランポリンやバスケットリング、卓球台、ビリヤードなどがあり、特にトランポリンを楽しみました。ファームステイ先のLalaさんに、色々な技を教えてもらいました。



背中に毒のあるカエル

夜になると、家の周りには毒ガエルがたくさんいました。



動物が大好きなホストマザー

3 1月8日の出来事

この日、私たちは、テレビ番組『世界の車窓から』で取り上げられたキュランダ溪谷鉄道に乗りました。車窓から見える景色は、緑の自然が豊かな心癒されるものでした。

キュランダ村では、オーストラリアのシンボルとも言えるコアラを抱いて、一緒に写真を撮ることができました。とても可愛らしかったです。



キュランダ溪谷鉄道

4 ミコマスケイでのシュノーケリング

ミコマスケイには、数えきれないくらいの鳥がいました。海の中には、色鮮やかな魚たちが悠々と泳いでおり、また、船の上からウミガメを見ることもできました。秋田ではできない貴重な体験をすることができました。



純白の砂州 ミコマスケイ



海中に見えるサンゴ礁



保護されている海鳥たち

5 海外で活躍している日本人にインタビューして

私がインタビューしたのは、レインフォレストロッジで働く大屋 泰斗さんです。



ロッジマネージャーの大屋さん

Q： オーストラリアになぜ来ようと思いましたが？

A： オーストラリアに一回来たことがあって、その時よいところだと思い、ここに住みたいと思ったからです。

Q： なぜこの職場で働いているのですか？

A： 日本ではなくオーストラリアで働きたいと思い、ダイビングとレスキューの講習を受けました。講習の期間中にこのロッジで手伝ってほしいと言われ手伝いをし、その後も何度か手伝っているうちに、ロッジのオーナーに、ここで働かないかと誘われ働き始めました。

Q： オーストラリアで1番困ったことは何ですか？

A： 言語です。英語が全く分からなかったので、理解できるようになるまでが大変でした。

Q： どのようにして英語を勉強しましたか？

A： 英語学校に通っていました。自分でよく使う文法のテキストを作り、素早く見て覚えるフラッシュバック方式という勉強法を取り入れていました。単語は、子供向けの物語を読んでわからない単語をピックアップし、CDで聞き、真似をして話せるようになりました。

オーストラリアで働いている日本人に、オーストラリアで働いて幸せかと質問すると、全員が幸せだと答えてくれました。インタビューを通して、私も将来チャンスがあれば、英語を生かした職業に就きたいと思いました。

VII 海外研修を終えて

初めての海外研修、ファームステイはとても不安でしたが、オーストラリアの人々が皆やさしく接してくれ、また、グループの人たちともすぐに打ち解けることができ、あっという間の9日間でした。今回感じたことは、なんでも積極的にチャレンジすることが大切だということです。英会話では、わからない単語があっても、相手の目を見てジェスチャーを交えることで、コミュニケーションをとることができました。今後さらに英語を勉強し、この海外研修で学んだことを忘れずに、より多くの人と会話して英語力を高めていきたいです。

最後に、お世話になったファームステイ先の皆さんや、教育委員会の先生方、添乗員さん、そして家族に感謝しています。本当にありがとうございました。



ホストマザーと一緒に記念撮影

オーストラリアレポート

No.6 大曲中学校 1年 加藤 遥

I はじめに

私がこの海外派遣研修に応募しようと思ったきっかけは、小学校のころから海外に興味があり一度行ってみたいという思いがあったからです。私は、家で海外のドラマや映画を見ていて、日本とは違った街並みや風景・自然などにとても興味をもちました。実際に行って、日本との違いを自分の目で見てみたいと強く思うようになり、この研修に応募しようと決心しました。

また、私はオーストラリアの自然環境は日本とはどのように違うのか、オーストラリア人と日本に住む私たちの環境保護のための心がけはどのように違うのか知りたいと思っていたので、次のような研究テーマを考えました。

II 研究テーマとテーマ設定の理由

研究テーマ

「大仙市からごみのポイ捨てを減らすには、どうしたらよいか？」

～オーストラリアで学んだことを大仙市で生かそう～

私が、大仙市内の道路を歩いていて感じることは、ポイ捨てが多いということです。中学校では、クリーンアップ活動として道端のごみを拾っていますが、ごみはなかなか減らないと思っていました。そこで、緑がたくさんあるオーストラリアでは、ごみのポイ捨てについて、日本とどのような違いがあるのかを知りたいと思い、この研究テーマを設定しました。

Ⅲ 研究方法・調べて分かったこと

1 研究方法

- (1) 町や観光スポットでは、ごみのポイ捨て対策としてどのような工夫がされているのか、自分で見つける。
- (2) オーストラリアで活躍している日本の方に、ポイ捨てについての実態を聞く。

2 調べて分かったこと

(1) どのような工夫がされているのか？

観光スポットには、必ずと言ってよいほど、たくさんのゴミ箱がありました。また、住宅街の中やショッピングのアーケード街の中にも、ゴミ箱がありました。ヤシの木と星をモチーフにしたゴミ箱や、青色のゴミ箱や、木のゴミ箱など、日本にはないようなデザインのゴミ箱でした。ファームステイ先のホストファミリーが連れて行ってくれた湖や森にも、ゴミ箱がたくさんあって、ポイ捨てでもありませんでした。



(デザイン・色・素材などに工夫がある、様々なタイプのゴミ箱)

また、ゴミ箱を等間隔に置くことによって、ポイ捨てを減らそうと工夫しているのではないかと思います。実際にゴミ箱は、約 300 メートルごとに一つ置いてあり、バス停には必ずゴミ箱がありました。

(2) インタビュー

マンガリーフォールズの自然の家で働いている日本人スタッフの方にゴミのポイ捨てについて聞いたところ、ケアンズは世界遺産であるグレートバリアリーフやウールヌーラン国立公園、バロンゴージ国立公園などが近くにあるため、自然を守るという意識が一人一人の心の中に根付いており、ポイ捨ては少ないのではないかということでした。国立公園にもゴミ箱があり、そのデザインは、街中に

あるような派手なデザインのものではなく、とてもシンプルで、大自然との調和を大切にしていることを感じました。

また、道路清掃車が路面をきれいにしていくため、町全体で環境美化に取り組んでいるとのことでした。このような細かい配慮と人々の意識の高さが、ポイ捨ての少ない理由の一つでもあると考えました。



(遊歩道をきれいにする清掃車)



(街のあちらこちらにある植え込み)

(3) 考 察

大仙市でもゴミの不法投棄をなくそうと、看板などを設置して呼びかけをしたり、監視カメラを設置したり、と様々な取組をしています。しかし、普段街を歩いていると、ポイ捨ての多さが目につきます。とても残念なことだと思います。そこで、大仙市でもオーストラリアのようにゴミに対する意識を高めていけば、状況が変わっていくのではないかと思います。

対策の一つはゴミ箱の設置です。オーストラリアでは、人が集まる色々な場所に色々なデザインのゴミ箱が設置されていました。大仙市でも、全国的に有名な大曲の花火をデザインしたゴミ箱や、秋田こまちをモチーフにしたゴミ箱を作り、町の様々なところに設置することで、ポイ捨てを減らすことができると思います。

もう一つは、自然を守る意識です。オーストラリアでは、インタビューからわかるように、人々の自然を守る意識が高いです。大仙市には、国や県で指定するような公園はないので、日常生活の中にある自然を守り環境を整える意識を高めていくことが大切だと思います。ゴミを捨てたくなくなるようなきれいな花壇をたくさん作ったり、町内や学校単位で、クリーンアップ活動などのボランティア活動を、定期的・積極的に行うことで、ゴミのないきれいな町づくりができると思います。

IV エピソード

1 町並みの自然が豊かだった

ファームステイ 2 日目に、ホストファミリーとお店がたくさんある場所にドライブに行きました。1 時間ぐらいのドライブをして、町の自然がとても豊かだと感じまし



(道路沿いの美しい緑)



(手入れの行き届いた植え込み)

た。どこに行っても手入れされている木や花があり、とてもきれいな町並みでした。日本では見られないとても素敵な風景だと思いました。

2 ファームステイ

ファームステイ 2 日目に、ホストファミリーが、機械で牛の乳搾りをしている工場に連れて行ってくれました。初めて機械で行う様子が見られて嬉しかったです。

その工場にはヤギや鳥、豚などの動物もいました。独特のにおいがして、少しくさかったですが、動物園にいるような動物ではなく、人間が生きていくための食用となる動物の姿を見ることができました。また、本物の豚とヤギは初めて見たので、とても貴重な体験でした。



ホストファミリーの皆さんに、お昼ご飯としてそうめんを作ってあげました。思ったより時間がかかってしまいましたが、ホストマザーが、「気にしないで」と言ってくれたので、あせらずに作ることができました。ゆですぎてしまったこともありました

が、ホストファミリーのみなさんは、日本語で「おいしいです」と言ってくれたので、とても嬉しかったです。

ファームステイ最後の日に、鶴をたくさん作って糸でつなぎあわせたものをホストファミリーの皆さんに渡すと、「beautiful」と言って、とても喜んでくれました。そんなに喜んでくれるとは思わなかったので「作ってよかったな」という気持ちになりました。

ホストファミリーの皆さんとお別れするのはさびしかったけれど、最後まで笑顔でやさしく接してくれたので、とても充実したファームステイを過ごすことができました。

3 同じ海なのに・・・

6日目には白い砂でできた美しい島ミコマスケイに行きました。ミコマスケイではシュノーケリングをしました。シュノーケリングで、さんご礁のあるところまで泳いでいきました。私は、今まで1度もさんご礁を見たことがなかったので、とても感動しました。色々な形のさんご礁があって、どれも独創的できれいでした。さんご礁の周辺にはテレビで見るような魚が何匹もいて、「本物だ!」とつい見入ってしまいました。海は塩の香りが強く、こんなに塩の香りがする海は初めてだったので新鮮な気持ちになりました。また、久しぶりの海だったこともあり、とても楽しかったです。ミコマスケイの海は、とても透明度が高く、青くきれいでした。

さんご礁を見たり、シュノーケリングをしたりと初めてのことがたくさん経験でき、とても楽しいミコマスケイ観光でした。



(シュノーケリングに挑戦)



(透明度が高く青い海)

4 海外で活躍している日本人

研修中にオーストラリアで活躍している方々のお話を聞く機会があり、特に、レストランのウェーターの小島さんの話が印象に残っています。小島さんのコミュニケーション能力を上げる方法には、なるほどと思いました。コミュニケーション能力を上げるためには

- ・怖がらないこと
- ・はっきり物事を言えるように努力すること
- ・伝わらなかったらもう一度と、あきらめず伝え続けること

が大切だそうです。

恥ずかしがらず失敗することを恐れずに話かければ、コミュニケーション能力はつ

き、どんなことでも必ず伝わるのだと思いました。小島さんには、「あきらめず挑戦し続ければ、伝わるよ」と言われたので、私も何かを伝える時は、あきらめずにがんばってみようという気持ちになりました。私は、今回のファームステイで、伝えることの大変さを身にしみて感じたので、その体験や小島さんから聞いたことを、将来に生かしていこうと思います。

V 海外研修を終えて

今回の海外研修で、私は、言葉の違う国の人とのコミュニケーションのとり方の難しさを知ることができました。また、言葉が通じた時の喜びを味わうこともできました。ホストファミリーとの会話にとっても苦労しましたが、辞書やジェスチャーを使うと、思ったよりもすんなりと伝えることができました。伝えようと一生懸命に努力すれば必ず伝わります。これからは伝えようとする心を大切にしていこうと思いました。

この研修では、日本ではできないことをたくさん経験し、多くの思い出を作りました。また、自分に自信をもつことができました。この研修に応募する勇気を与えてくれた担任の先生や家族、そして機会をくださった大仙市や学校の皆さん、ありがとうございました。経験したことを将来に生かしてがんばっていきたいと思います。

オーストラリアの自然環境

No.7 大曲西中学校 1年 山崎 未夢

I はじめに

私が中学校海外派遣に参加したいと思った理由は、二つあります。

一つ目は、自分の英語力を試したかったからです。私が学んできた英語は、現地でどれくらい通用するか知りたいと思いました。

二つ目は、オーストラリアの自然環境について興味があったからです。オーストラリアは、どうして自然が豊かな国として有名なのか。一方、オーストラリアの中で砂漠化が進んでいる地域があることに對して、オーストラリアの人たちはどのような考えをもっているのか。また、日本とオーストラリアでは、今問題となっている地球温暖化や、オゾン層が破壊されているという事実の受け止め方に、どのような違いがあるのか。このような環境に関する疑問を解決するために、私はオーストラリアに行きたいと思いました。

II 研究テーマ

自然環境をより良くするためには、どのような工夫があるのか？また、環境に対してどのような取組をしているのか？

設定の理由

世界中で自然環境の改善が意識されている中で、美しい自然を保有しているオーストラリアの環境保全の工夫を調べ、日本でも取り入れられるものを見つけるため。

III 研究の方法

- ① ケアンズの街を見て、身近な工夫を見つける。
- ② 自分の家族とファームステイ先のホストファミリーに同じ内容のアンケートを取り、違いや工夫を見つける。

調べた結果

<街で見かけたもの>

① 雨水を集める貝型の屋根の施設

② 数多く設置されているゴミ箱



<家庭での工夫> ファームステイ先へのアンケートの結果から

① 地球温暖化について

ホストファザー：人間が影響を与えたと思う。最近、天候が極端になってきた。

私の家族：自然災害を及ぼすので、止めなければいけない。

② 節水について

ホストファザー：ダムで雨水の確保をし、シャワーなどの時間をきっちり決めて節水を心がける。

私の家族：水の出しっぱなしがないように注意する。

③ 環境保護について

ホストファザー：みんなで解決策を話し合う。

私の家族：豊かな自然を守りたい。

④ オゾン層の破壊について

ホストファザー：人間の食欲さが招いた事態だと思う。

私の家族：よくわからない。

⑤ 地域の活動について

ホストファザー：多くの自然公園の動植物の保護をしている。

私の家族：クリーンアップ

⑥ 日本の環境について

ホストファザー：旅行したとき、山と木がたくさんあった。

私の家族：自然災害がこわい。

<考察>

オーストラリアの街では、ゴミ箱を多く設置するなど、ポイ捨てを少なくする工夫や、雨水をためるための屋根やダムなど、資源を大切に使うための施設が見られました。国をあげて環境保全に取り組んでいると思いました。

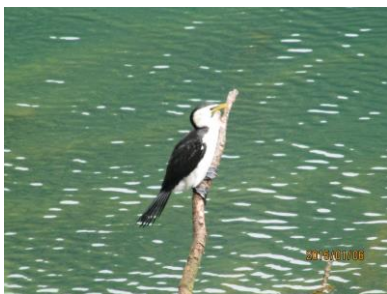
ホストファザーは、私の家族よりも自然環境についてよく考えていると思いました。特に、水を大切にすることは、雨季と乾季があるオーストラリアならではの工夫だと思いました。

私は、大仙市という自然豊かな環境で暮らしているため、環境問題を切実に考えることが少なかったように思います。もう少し環境のことについて考えなければいけないと思いました。

IV エピソード

たくさんの生き物

自然が豊かなオーストラリアには、見たことのない動物がたくさんいました。



カササギフェガラス



ウォータードラゴン



ブッシュターキー

ファームステイ先での出来事

ホストファミリーのカーヒルさんは、私たちが山や川、湖に連れて行ってくれました。



ホストファミリーと行った溪谷や湖

上の写真のような、景色がよく自然豊かなところでした。あちらこちらから、聞いたことのない動物の鳴き声がしてくることもあって、びっくりしました。

中でも一番驚いたのは、右写真の「アバターの木」です。この木は、映画「アバター」にも出てくる大きな木で、たくさんの木や植物が絡み合ってきたと聞きました。

こんなに大きくなるには、きっと長い年月がかかったのだと思いました。その間、この場所の環境が破壊されることなく維持されてきた結果、こんなに大きく育つことができたのだと思います。

いかに環境保全が大切なのが分かりました。



日本の伝統文化のお土産

私たちはお土産として、折り鶴、そうめん、はちまきなどをホストファミリーの皆さんに贈りました。折り鶴は特に喜んでくれて、部屋に飾ってくれました。一生懸命作った甲斐がありました。嬉しかったです。また、大曲の花火もポスターを見せて紹介しました。写真を見て、綺麗だと言ってくれました。



カーヒルご夫妻と一緒に

3日間という短い期間でしたが、優しく接してくれたことを忘れません。ケアンズでの楽しい思い出をたくさん作ってくれたカーヒル家のワレンさんとアンさんに、心から感謝しています。

V オーストラリアで働く日本人 小島さんのおはなし

小島さんは、現在、オーストラリアのレストラン「THE RAW PRAWN」で働いています。「THE RAW PRAWN」とは、日本語で「生のエビ」という意味で、小島さんは、魚介類を使った美味しい料理を給仕しています。小島さんのお話を聞いて、私は、夢の実現について考えました。

小島さん： 僕は、子供の頃から、外国の人と話ができる仕事がしたいと思っていました。大学生のときに訪れたバリ島のホテルで、とても楽しそうに働いているスタッフを見て、「リゾート地のホテルやレストランで働くという自分の夢を叶えたい」とさらに強く思うようになりました。18歳からニュージーランドに住んでいる弟が、外国人との会話の楽しさを教えてくれたことも大きかったです。

こうして、僕は24歳の時に、オーストラリアのケアンズに行くことを決心しました。親は快く賛成してくれました。

最初はレストランでアルバイトをしながら英語の勉強をしました。でも、現地にいる日本人とは日本語で話していました。そうして気づいたら、英語から逃げている自分がいました。「これではいけない。ここで責任をもって仕事ができるようになるためには、英語力が必要だ。」と思い直し、もっと英語の勉強をしようと思いました。

そこで僕は、家で英語のドラマや映画をひたすら見ました。そして、使えそうな言葉を直ぐに会話で使ってみました。すると、オーストラリアの人たちと話が弾むようになりました。また、会話の中での分からない言葉は、オーストラリア人の友達が快く教えてくれました。

<小島さんが私たち中学生に伝えたいこと>

- ・分からないことがあったら、分かったふりをしないで聞き返すこと。
- ・教科書には載っていない英単語がたくさんあるので、教科書以外の文章をたくさん見聞きすること。

<小島さんにインタビュー>

Q1 家に帰りたと思ったことはありませんでしたか。

A ありました。でも、そんな時は、友人と遊んだり、仕事に集中したりしました。

Q2 オーストラリアに来て困ったことはありませんでしたか。

A ここでは、日本のように、「時間ぴったり」ということはありません。だから、バスや電車が時間どおりに来ない時や、買い物をしたいお店が、時間どおりに開店しない時は困りました。

<感想>

小島さんは、小さい頃からの、「外国で働きたい」という強い願いがあったからこそ、頑張り続けることができたのだと思いました。私も夢をかなえたいという強い気持ちで、色々なことに挑戦してみたいと思います。時には失敗するかもしれませんが、でもそんな時は、小島さんのように、あきらめないうで努力し続けたいです。

VI 研修を終えて・・・

オーストラリアの人たちは、心が広く、優しい人たちがいっぱいでした。多少の失敗があっても、いつも落ち着いていて笑顔だったので、そこを見習いたいと思いました。また、私がたどたどしい英語で話した質問に、分かりやすく丁寧に答えてくれました。

環境に関する質問に答えてくれたお話の中には、驚いたことや感心したことがたくさんありました。また、日本に比べて、オーストラリアの人たちは環境をより良く理解するために、よく話し合い、様々な対策をとっていることも分かりました。日本で生活していると、自分たちは環境のことについて話し合う機会が多い方だと思っていましたが、実は、環境に対してあまり真剣に考えていないところもあったのだと気づかされました。

研修に参加する前は、オーストラリアといえば、植物や水がたくさんある国という印象しかありませんでしたが、オゾン層が壊れ始めていたり、砂漠化が進んでいたりしているという事態に直面していて、それを食い止めようと努力していることを知りました。環境を良くするための工夫の中には、すぐに日本でも実践できることがたくさんありました。今回学んできたことを生かして、環境をより良くしていきたいです。

私は将来、日本の文化や絶景などを外国の人たちに伝えたいと思っていました。研修を終えて、さらに、外国の優れた文化や知恵を、日本の人たちに伝えることもしていきたいと考えようになりました。オーストラリアの素晴らしさを実感したからです。きっと、どの国にも学ぶべきよさがあると思います。

この将来の夢を実現させるためにも、もっと英語の勉強をしたいと思いました。オーストラリアでは、自分の伝えたいことを十分に伝えることができない時がありました。言葉を理解しないと、正確に思いを伝えることは難しいと思います。だから、英語を上達させて、多くの人と、もっとたくさん会話ができるようにになりたいです。

この海外派遣では、本当にたくさんのことを学びました。生まれた国や言葉が違って仲よくなれること、分からないことやできないことがあっても挑戦してみると、新しい何かが発見できることなどです。

そして、楽しいこともたくさんありました。コアラを抱いたり、アボリジニショーを見たり、オーギーキッズと交流したり…。美しい海やキュランダ急行からの景色を見たことも、とても心に残り、どれも大切な思い出になりました。

これらの経験を生かして、これからの生活や将来の夢に向かって頑張っていきたいです。



渓谷を走るキュランダ高原列車



グレートバリアリーフの青い海

1 はじめに

私は、当初オーストラリアの海外派遣研修に参加できるとは思っていませんでしたが、幸いにもその機会をいただくことができました。

そこで、「オーストラリアの環境について見てくる」ことと、「自分自身の英語力を向上させる」という課題をもって研修に臨みました。

2 研究テーマと設定理由

オーストラリアは二酸化炭素の削減のためにどのような取り組みをしているのでしょうか。

私たちの学校では環境学習に取り組んでいます。1年生、2年生の学習いずれでも話題に上るのが、二酸化炭素の削減ということでした。そこで、オーストラリアの環境と二酸化炭素の排出量はどのように関係があるのか知りたくなり、研究テーマを「CO₂の排出を少なくするには、どのようなことをすればよいか？」と設定しました。

3 調べた内容

① 自然について

オーストラリアは、大仙市以上に自然が豊かでした。ファームステイをしたところは畜産が盛んで、放牧をしている家庭が多く、家の周りには樹木がたくさん植えてあり、自然環境が保たれていると思いました。大仙市も田畑がたくさんあり、木々も豊かでエコカーも割と普及していることから、比較的自然環境が保たれている街だと思います。

オーストラリアでは、エコカーは普及していないようで、あまり見かけませんでした。私が訪問した家庭では、どのお宅でも車を約2台持っていました。でも、道路はたくさん車が走っているということではなく、出かけてもすれ違う車は3台くらいで、頻繁に車を使って外出することはないようでした。このように、オーストラリアは自然が豊かなだけでなく、生活様式の影響もあり、二酸化炭素の排出が少ないのではないかと思います。

② 二酸化炭素について

オーストラリアでファームステイした地域は、樹木がたくさん植えられており、車もあまり多く走っていなかったため、二酸化炭素はあまり排出されていないように思いました。一方、市街地では車が走り回りお店も沢山あったので、二酸化炭素は比較的多く排出されているように思いました。しかし、私たちが行ったケアンズという街には工場がそれ程多くなかったため、二酸化炭素はあまり排出されていないというイメージ

ジをもちました。このことから、オーストラリアの山間部は樹木がたくさんあるため二酸化炭素があまり排出されていないことと、市街地では車が多く走っているものの、工場が少ないため環境がそれ程悪化していないということがわかりました。

③ 環境への配慮

オーストラリアでは環境への配慮として次の三つのことが行われていました。

一つ目は水についての配慮です。オーストラリアではシャワーの時間が3～4分と、とても短かったです。「3分でシャワーをしてね。」と言われたときはとても驚きました。自分の家ではいつも長い時間シャワーを使っているのが最初は大変でした。食事の後の食器を洗うのも、水道水を流しながら長い時間洗っているのではなく、溜めた水で汚れを落としてから食器洗い機でもう一回洗っていたので、環境によいなと思いました。

二つ目はコンセントの工夫です。オーストラリアのコンセントは人の字の形になっており、その隣にはオンとオフのスイッチがありました。日本はコンセントにプラグを差すとすぐ電気が流れてしまうので、スイッチを押してからでないでないと電気が流れないというオーストラリアのシステムは、とてもよいと思いました。

三つ目はゴミ箱の多さです。市街地では、歩道の脇にかなりの数のゴミ箱が置いてありました。私は、海外では道路へのポイ捨てが多いのではないかと思いましたが、実際はきれいな道路が多く、ゴミ箱が置いてある効果ではないかと思いました。

私は、オーストラリアはそれ程環境が良いところではないと思っていましたが、節水や節電、ゴミの処理など、様々なことにしっかり取り組んでいるということがわかりました。オーストラリアは環境に配慮している国だと思いました。

4 考察と感想

二酸化炭素の排出を少なくするために、私たちができることはたくさんあると思います。一つ目は、車をあまり使わないことです。車はとても便利です。移動の時間を短縮したり、移動にかかる労力を減らしたりできるメリットがあります。一方で、環境にとっては大きなダメージを与えます。だから、人間だけが100%の便利さを求めるのではなく、環境と分かち合えばよいと思います。夏は自転車を使い、冬はなるべく徒歩で出かけることなどを心がけるべきです。二つ目は、こまめに電気を消すことやエアコンの設定温度を変えることなどです。これらのことにより、電力の消費を少なくできるからです。三つ目は、ゴミを少なくすることやゴミの分別を心がけることです。それにより、ゴミを処理する時の二酸化炭素の排出を減らすことができます。

私たちが二酸化炭素を削減しようという意識を常にもち、身の回りでできることを実践し続けることが、最も大切なことだと思います。

私は、オーストラリアで感じたことが三つあります。

一つ目は自然環境のよさです。ファームステイした地域では牛の放牧をほとんどの家庭で行っており、緑がたくさんあって美しい場所でした。樹木もたくさん植えてあり空気がきれいだなと感じました。車もあまり多く走っていないくて環境が保たれた自然が豊かな場所でした。

二つ目は動物がたくさんいるということです。ホストファザーといっしょにドライブをしましたが、車で走っていると、道路脇に牛や馬、羊やバッファローなどたくさんの動物がいました。動物たちは日本で見るような牛や馬より、遥かに大きかったので驚きました。大きくなった理由には、種類もあるかも知れませんが、育った環境なども関係していると思います。また、食べるものも違うのではないかと思います。

三つ目はオーストラリアの気候についてです。オーストラリアは日本と逆の季節になっています。訪問したのは、「シャワー」といって、日本でいう「にわか雨」が多く降る時期でした。訪れた地域では雪が降らず、暑いか肌寒いかのどちらかで、気候は秋田と比べると寒暖の差が少ないと感じました。



(搾乳のため牛舎に向かう牛の行列)



(キュランダ溪谷のストーンクリーク滝)

5 エピソード

① 飛行機が欠航した！

1月3日に成田から飛行機でケアンズに出発する予定でしたが、ジェットスターの乗務員が病気になり欠航になってしまったことがとても印象に残りました。でも、成田で泊まったホテルはとても素敵な所でした。いつかまた行ってみたいです。

② ファームステイでの出来事

ファームステイでは皆でUNOを楽しみました。ホストファザーのボブさんも一緒にやりました。私自身あまりやり方を知りませんでしたが、皆が教えてくれたり練習をつ

けたりしてくれたので、UNOが好きになりました。

ファームステイ先では犬を一匹飼っていました。その犬は抱っこをしていると吠えないのですが、下ろすといきなり吠えだすので、初めはとても驚きました。

ステイ先では、家族の皆さんに日本食を料理してプレゼントしました。稲庭そうめんと、しじみスープとおせんべいを出しました。作るのはとても大変で、つゆの分量を計算しながら作りました。おせんべいは口に合うかととても心配でしたが、「とてもおいしい」と言ってくれてうれしかったです。



最終日には、ホストマザーに折り紙と色紙のプレゼントをしました。折り紙で鶴を折ってあげたら「It's so cute!」と言ってくれました。

どのプレゼントも喜んでくれてうれしかったです。

6 現地で働く日本人にインタビュー！

マンガリーフォールズで働くまきこさんという方にインタビューをしました。

まきこさん

Q 大切なことは？

A 伝えたい気持ちを常にもって、アクションも交えて、たまに聞き方も変えてみること。

Q なぜオーストラリアで働こうと思ったか？

A 文化の違いを知ることができるから。オーストラリアの人はフレンドリーなので、私も楽しく働くことができる。お客さんにはいつも笑顔で対応している。

Q 大変なことは？

A 全部。日本とは様々な点でやり方が違うので、変えていくのが大変だった。でも、ここではそのような日本と逆のこともきちんと教えてくれる。

Q 環境はどうなっている？

A 食べ物を残す人が多く、都市ではポイ捨ても多いと感じる。

Q 大きな違いは？

A 男の人が日本人に比べ優しい。

私は、まきこさんのお話を聞いて、英語力を向上させるためには「伝えたい気持ちを

常にもつ」ということが大切なのだと思いました。勉強ももちろんですが、話すときは伝えたい気持ちが大切とおっしゃっていたので、私も英語で話すときは伝えたい気持ちを明確にしたいと思いました。そして、「伝えたい気持ちをもつこと」は、英語で会話する時だけでなく、日常の生活で日本語でコミュニケーションする時にも求められることだと思います。それが自分の英語力を向上させる力となると感じました。今後、学校や家でもこの気持ちを忘れずに生活したいと思いました。

7 全体の感想

私は、オーストラリア研修に行くことができうれしく感じています。オーストラリアでは、ファームステイやオージーキッズとの交流、市街地散策など様々な経験をすることができ、どれもがとても楽しかったです。大仙市の中学校から20名が集まって行くということで、とても不安でしたが、皆とも仲良くなることができたのでそれも収穫でした。

最後になりますが、この研修に行くことができたのも教育委員会の皆さん、学校の先生方、家族の支えがあったからだと思います。本当にありがとうございました。

オーストラリアで学んだこと

NO.9 大曲南中学校 2年 宮野希歩

I はじめに

「ここにいるみんなとオーストラリアに行くのか！」

みんなと初めて顔を合わせた日、期待がより一層高まった反面、私がオーストラリアに行けるのだろうか、うまく英語を話せるのだろうか、という不安が押し寄せてきました。海外研修という、私にとって人生初の、そして未知の体験ができることはとてもうれしいことです。今、世界はグローバル化してきていて、インターネットを使えば誰とでも交流できる中、直接的なかかわりを持ちながらネイティブイングリッシュを体験できることは、私の夢への第一歩です。この貴重な体験を利用して、英会話能力だけでなく、自分の学校テーマでもある環境について、日本とオーストラリアの違いに触れる機会にしたいと思いました。

II 研究テーマと設定理由

私たちの大曲南中学校では環境の学習に力を入れています。日本の水に関しては、量的にも質的にも恵まれているということを知りました。逆に海外では、「安易に水道水を飲んではいけない」ということを聞きました。それに加えて、オーストラリアにおいては水がとても重要なものだという話も聞きました。そこで私は、大仙市とオーストラリアの水の使い方、水に対する考え方にはどのような違いがあるのかということに疑問をもち、今回の研修テーマを『水の無駄使いをなくすにはどうすればよいか?』と設定しました。

III 調べた内容

1 オーストラリアの自然について

オーストラリアは大仙市よりも緑にあふれ、町のあちこちで自然が見られる、というよりも、町自体が自然に囲まれているような印象を受けました。野生動物などが多く生息しており、ファームステイ先に向かう途中では、たくさんの牛や羊が放牧されているのを見ました。

(1) 環境

私たちが訪れたケアンズには世界最大の珊瑚礁グレートバリアリーフがあり、熱帯雨林も多く見られました。実際に、ファームステイ中に国立公園に連れて行ってもらい、様々な動植物を見ることができました。国立公園には、他にも滝や大きな沼など自然がそのままの姿で残されていました。公園内には看板がたてられており、内容は「ここにゴミを捨てないでください」というものでした。ポイ捨て禁止の注意書きの看板が立てられているのは日本と同じだと思いました。その注意書きの効果もあってか、ゴミが落ちていることはありませんでした。

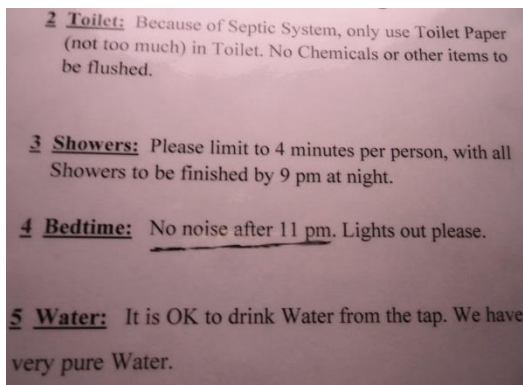


(グレートバリアリーフの珊瑚礁)

また、公共施設や店ではゴミの種類によって捨てる場所が違っていました。これも日本と同じで、しっかり分別されていると思いました。日本と同じ対策をとっていることや、さらにそのルールをしっかり守ろうとしている住民の方々に感心しました。

(2) 生活と水

事前学習会でも、オーストラリアでは水がとても重要だと聞きました。私は水には苦勞のない生活をしているので、お金を払って飲料水を買うと聞いたときには驚きました。そんなに高くはないだろうと安易に考えていましたが、実際に行ってみると、日本でクレープを買うぐらいの値段(約350円)でびっくりしました。ファームスティ先では水をどう考えているのか、日本のような生活をしたら大変なことになるだろうなどと、少し不安に思いながらオーストラリアでの生活が始まりました。



ファームスティ先には、水に関するルールを書いた紙が貼られていました。まずはシャワーです。日本と違って水が豊富ではないので、シャワーの時間が限られていて3、4分という短い時間で済ませるよう指示されていました。シャワールームには浴槽があったものの、お湯は張られていませんでした。いつも浴槽を使用する私にとっては、ゆっくりと体を洗うことができなかつたので、日本との大きな違いを感じました。また、食器を洗うときもさっとすすいで終わりでした。水の使用についてはかなり意識されていることが分かりま

した。水道水も場所によっては日本と違ってそのまま飲めるわけではありません。そのため飲料水としては、ペットボトルの水を買って飲まなければならず、大変でした。環境保全という視点では、日常生活における水のことだけではなく、ミコマスケイというグレートバリアリーフの観光地では、自然を守っていくために船を停泊させる位置を考慮したり、ゴミを捨てる場所を決めたりする工夫を見ることができました。その成果もあってか、海はとても青くて綺麗な珊瑚礁がたくさんありました。



(3) 水の使用とその対策

オーストラリアの一人当たりの年間の水使用量は、約1,100立方メートルで、日本よりも多いです。しかし、そのほとんどは農業用水としての利用です。深刻な干ばつが発生すると、小麦や大麦など水に頼る作物だけでなく、米や綿花などの生産にも影響が及ぶそうです。そこでオーストラリアでは、水の節約技術を高め、水のリサイクルにも力を入れるようになってきたそうです。日本でも、下水道の水を新幹線の洗車や公園の噴水に利用している例もあるので、資源を大切に使う考え方は同じであることが分かりました。

2 考察

日本だと、普段は無敵だと感じてしまうくらい何不自由なく使っている水ですが、オーストラリアでは、地形や天候等の自然環境の影響で水が大変貴重なため、水の確保という課題は、生きていくために真剣に向き合わなければならない課題として人々を悩ませていること知り驚きました。水は生物にとって必要不可欠な資源の一つです。これからは手を洗うとき、歯を磨くとき、食器を洗うとき、お風呂に入るときなど、水を使用するときはいつもより意識して「節水」しようと思いました。日常から心がけていると、旅先でも不便を感じることはないと思います。そしてそのためにはやはり呼びかけることが大事です。ファームスティ先でも見られた、使用する場所での視覚に訴える呼びかけは、水を無意識に扱っている人に、意識をうながす力があります。自分たちの恵まれている生活に甘えることなく、ちょ

っとした呼びかけ、声かけを進め、一人一人の小さな意識が資源の大きな節約に結びつくことを訴えていきたいと思います。何気なく使っている「水」に感謝の気持ちを感じた体験でした。

IV エピソード

1 ファームスティ先の生活

何よりも自然が多いというのが私の第一印象です。家も日本とは全く違う造りで、オシャレなお店のような感じでした。「オーストラリアは食事がすごい」というのは前から聞いていたので、ちょっと期待しながら行ってみましたが…。想像以上にすごかったです。私たちが着いたのは昼頃でしたが、昼から大きなハンバーガーが出てきて、“おお、これがオーストラリアか！”と思いました。その日の夜は隣の家の人に来て、一緒にご飯を食べました。日本では隣の家の人と一緒に食事をするという事はあまり無いので、新鮮な気持ちで過ごしました。そしてこれでごちそうさまだろうと思っていたら、デザートが出てきました。注目すべきはそのサイズと中身でした。日本の家ではあまり作らない、お店で買ったようなスイーツが出てきました。さすがにこれにはびっくりして、「Oh…How big…」と言ってしまったほどです。お店で売っているようなデザートが作れるなんてすごいと思いました。逆に私たちも、自分たちにもできる日本らしいものということで、そうめんを持参してごちそうしました。折り紙で作った千羽鶴も含めて、スティ先のペアレンツにはとても喜んでもらったのでうれしかったです。サイズではかありませんが、気持ちは伝わった気がしました。

次の日は国立公園に行って公園内を歩き回りました。たくさんの植物や滝、川などがあって気持ちよかったです。野生動物のワラビーも見ることができました。

2 私の身に起こったできごと

ファームスティの二日目。昼頃に私は熱を出してしまいました。その時は自分でもびっくりしました。オーストラリアではよほどの病気かケガでない限り病院には行かないそうです。初めての海外で、その上に熱まで出してしまって、ペアレンツや先生方には本当にご心配やご迷惑をおかけしました。海外で熱を出すとどれだけ大変かを、身をもって知ることができました。幸運にも二日後には全快して、みんなと合流することができました。オージーキッズとは一緒に遊ばせませんでした。これだけ早く治せたのも先生方のおかげです。本当にありがとうございました！



3 派遣生徒 in ケアンズ

ケアンズではキュランダ溪谷鉄道に乗ったり、買い物をしたり、とても楽しい時間を過ごせました。キュランダ溪谷鉄道はとても長い鉄道で、さとうきび畑やストーン・クリーク滝などの絶景を見ることができました。到着したキュランダ村は私が想像していた「村」とは全く違い、店がたくさん並んでいて、公園もあり、人もたくさんいたのでとても都会的な印象を受け



(オシャレな造りの家)



昼食の大きなハンバーガー

ました。そして、そこでアボリジニのショーを見たり、生まれて初めてコアラを抱っこしたりしました。コアラは毛が柔らかいイメージがあったのですが、少し固かったです。

そこからバスで再びケアンズに戻り、自主研修をしました。見知らぬ都会で友達と歩くのは不安でしたが、街を歩いているうちにいつもとは違う景色に夢中になり、大いに楽しむことができました。都会といっても日本のように高いビルが建っているのではなく、個人経営の気さくな商店の雰囲気のお店が多く、日本人も多かったので、とても入りやすかったです。



(熱帯雨林植物、エルクホーンフーン)

4 なぜ、ここに日本人!?

これまでも話してきたように自然が多いケアンズですが、そこで働いている3人の日本の方にインタビューをすることができました。そこで私の将来に必要なことを質問してみました。

Q. 海外に住もうと思ったきっかけは何ですか？

A. 中学生・高校生くらいの時から、将来は英語を使った仕事に就きたいと考えていました。海外の文化に興味をもちはじめ、英語を話せるようになりたいと思い、海外に移住しました。

Q. コミュニケーション能力を向上させるにはどうしたらよいですか？

A. 怖がらずにはっきり伝えようと挑戦することです。簡単な単語を言うだけでもよいので、相手の目を見てしっかりと伝えることが大事です。

Q. 英語力をあげるにはどうしたらよいですか？

A. 家でできることは、映画やドラマ、新聞を英語版で見ることです。外国人の友だちと買い物に行くのもよいです。あとはとにかく会話をして慣れることが大事です。

Q. 日本との文化の違いで苦労していることは何ですか？

A. オーストラリア人はイージーゴーイングだから、ルーズな人もいるので時間どおりに物事を進められないことがあります。また、人との接し方も違います。外国人は人の目を見て話したり、挨拶を気軽にしてくれたりします。日本人は他の人に無関心なところがあるので、文化の違いが行動の違いにつながっていると思います。

Q. オーストラリアに来てうれしかったことは何ですか？

A. 友だちと英語を使って自分たちの国の情報交換ができたことです。色々な国の人の考えが聞けるようになって、とてもおもしろいです。また、日本のよさを再確認できたのでよかったです。

インタビューさせていただいた小島さん、原田さん、黒田さんは、ちょうど私たちと同じ年齢のときに海外に興味をもち、英語を話せるようになりたいと考えていたそうです。改めて経験することが大事なのだと思います。黒田さんは、英語力をあげるために、好きな本をあえて英語版で読んでいるそうです。自分の好きなものだとモチベーションもあがり、楽しく英語を習得できるので、真似したいと思いました。そして、「挑戦する」ことも重要だと思いました。「失敗して当たり前！」くらいの気持ちで、これからは何事にも挑戦していきたいと思いました。貴重なお時間にもかかわらずインタビューさせていただき、本当にありがとうございました。

V 海外研修を終えて

初めて海外に行ってみて一番感じたことは、日本はとても恵まれているということです。私の研究テーマでもある「水」についてですが、国が違うだけで使い方や考え方がだいぶ変わることを学びました。オーストラリアは入国審査や税関もとても厳しく、それだけ環境や観光資源を守るために一生懸命取り組んでいるのだと思いました。

ケアンズでは、現地で働く日本の方々にインタビューをすることで、将来の夢について深く考えることができました。私はコミュニケーションが上手ではないので、初めての人とはあまりうまく話せませんが、挑戦することが自分を高めることだと教わったので、これからその気持ちを忘れずに過ごしたいと思います。



(仲良くなったメンバー)

このメンバーとの研修では、最初は自分を抑えて遠慮してしまい、本音がなかなか言えませんでした。しかし、様々な体験を通して「自分の考えは言わなければ伝わらない」ということを学び、最終的には意見を言えるようになりました。研修中に、一人一人のよさや意外な一面を見つけることもでき、当初よりも仲良くなれました。このメンバーで行けたことをうれしく思います。

最後になりますが、この研修のために、たくさんの人からご協力をいただきました。大仙市をはじめ、教育委員会の方々、学校、そして親にも感謝の気持ちを忘れずに過ごしたいと思

います。中でも引率して下さった高橋規子先生、五十嵐圭子先生、日本旅行の飛田亮さんには本当にお世話になりました。オーストラリアで学んだことを大仙市や日本の未来に生かすために、今私にできることは何かを考え実行していきたいと思います。

海外派遣に参加させていただいたこと、とても光栄に思っています。本当にありがとうございました！

オーストラリアの環境保護の取り組みから

No.10 平和中学校 2年 佐々木 彩乃

1 研修に参加した動機

私は幼い頃から英語に接する機会が多く、海外にも興味がありました。中学生になって、英語に接する機会が増えるにつれて、海外に対する興味も増していきました。そんな中でこの研修のを知り、自分の英語は海外で通じるのか、また、他国にはどんな人がいてどのような暮らしを送っているのか、それらのことをファームステイなどを通して知りたいと思い、この研修に参加させていただきました。

2 研究テーマと設定理由

研究テーマ 自然環境を保護するためにはどうすべきか？

私たちが在住している大仙市は、面積の約6割を森林原野が占めています。私は、半分以上が森林だということを知って、とても驚きました。しかもただ緑が広がっているのではなく、森林公園やスキー場など、自然を有効に活用していて、自然環境への配慮が感じられます。

では、大仙市よりもはるかに広大で自然が豊かなオーストラリアでは、自然を守るためにどのような取り組みをしているのでしょうか。それが知りたいと思い、上記の研究テーマを設定しました。

3 研究した内容と結果

私は自然環境を保護するための第一歩は、地球にやさしいエコな活動することだと思いました。節水、節電などたくさんありますが、オーストラリアではどのようなエコ活動をしているのか、ファームステイでの生活や訪問先で気づいたことをまとめました。

① 水の使用量

- 飲料水———基本的に水道水は飲むことができません。ボトルなどに入った市販の飲料水やジュースを飲みます。また、市販の飲料水の値段は少々高いです。
- 洗濯———週に1～2回程度行います。私のファームステイ先では、続けて同じ服を着て、洗濯用の水の無駄を省いていました。
- バスルーム——ファームステイ先にバスタブはありませんでした。日本のようにバスタブにお湯をためる必要がなく、水の使用量を大幅に削減できます。シャワーの使用時間は、ファームステイ先では3分間、ロッジでは5分間でした。

② 節電

- 照明—— ファームステイ先の家族は、ほとんど電灯をつけませんでした。オーストラリアの日照時間は長いので、午後5～6時でも明るかったです。日中は日光だけで過ごし、夕方になるとリビング、キッチンの電灯をつけます。人がいない部屋の電灯はつけません。夕食後は全ての部屋の電灯を消し、家族全員が居間に集まって、真っ暗な中でテレビを見ていました。さらに、就寝時間が早いため、1日の照明の使用は、多く見積もっても約4～5時間程度で済みます。

③ 廃棄物

- ゴミの分別—— 見たところ、あまり分別には気を配っていないようでした。気づいた限りではゴミ箱の数もキッチンに大きいのが一つ、リビングとバスルームに小さいのが一つずつと、少なかったです。
- ゴミの処理—— ジュースや飲料水のボトルを花瓶代わりにして、花などを育てていました。また、スイカを食べたときに、スイカの皮は飼育している動物に、エサとしてあげるように言われました。

4 考察

以上のことから、オーストラリアでは、常日頃から環境に気を配った生活をしていることが分かりました。節水に関していえば、水道水が飲めないことから、根本的に日本の状況とは異なりますが、日本は水資源が豊かなため、逆に無駄遣いをする人が多いのだと思います。そこで、大仙市で自然環境の保護につながることを考えた結果が、次の通りです。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">● 大仙市民全体が自然環境保護に対する意識をもつ● 温暖化やオゾン層破壊など地球の現状を知る● 勤務先や学校などの公共の場で、必然的にエコ活動に取り組む状況をつくる |
|--|

オーストラリアと比較してみると、日本は、節水や節電に対してもっと敏感になるべきだと思いました。日本でもテレビのコマーシャルなどで呼びかけているのをよく目にしますが、ただコマーシャルを「見るだけ」で、実際に行動を起こそうとする人はとても少ないと思います。いくら日本の水資源が豊かだといっても、それがいつまでも続くとは限りません。未来の自分たちのために、私たち自身をもっと地球を大事にするという意識を高くもつべきだと、私はこの研究を通して強く感じました。今、自分の町の自然はどんな状況なのか、その状況を維持、または回復するにはどうすれば良いのかをまず「知る」ことも大切だと思います。知った上で、行動を起こすか起こさないかは私たち自身の判断です。

自然環境を保護するために、自分たちができることはたくさんあるということが分かりました。平和中学校では、避難所開設訓練の際に節水と呼びかけています。普段の生活にもそれを生かすように努力しています。私が発見、経験してきたことをいろいろな人に発信して、大仙市のため、日本のために貢献したいと思います。

エピソード

①ファームステイ



所々に牛がたくさんいました

1日目

ロッジにはホストファザーのボブさんが迎えにきてくれました。ロッジから車で家に到着にするまで、長い道のりと時間を要しましたが、道中いたるところに牛がいて、見つける度にボブさんは車をとめてくださり、私たちに写真を撮らせてくれたので、退屈しませんでした。

私が滞在したラッセル家は、見渡す限りの草原が広がる、空気がとても

清々しいところがありました。大きなプールや卓球台、ビリヤード台があり、部屋数も多いとても素敵な家でした。ボブさんはUNOというカードゲームが大好きで、初日は1日中UNOをしていました。夕食は、ホストマザーのカーメルさんが作ったチーズハンバーグ、茹でたインゲン豆、トウモロコシを食べました。少し量は多かったものの、とてもおいしかったです。

その後、自分たちの部屋で荷物を整理しているとボブさんがやってきて、こう言いました。

“Girls, it’s shower time. You mustn’t use shower for more than three minutes.”

(皆さん、シャワーの時間です。シャワーは3分間しか使ってはいけません。)

これを聞いたとき、予想以上に短い時間にびっくりしました。そこで、私たちはタイマーを使って、シャワーで水を出してから止めるまでの時間を細かく計って使いました。

夜9時に、ミルクで作ったアイスクリームの上に、マンゴージャゼラートののったデザートを食べました。新鮮なマンゴーと濃厚なミルクの味が口いっぱい広がって、とてもおいしかったです。材料のミルクもマンゴーも全て自分たちの手で育て、得たものだそうです。いわばラッセル家は、ほぼ自給自足の生活を送っていました。

2日目

朝食を食べ終えた後、ご近所さんの家に行くと言い、向かったところはとてもご近所さんとはいえないほど遠いボーガート家でした。到着してすぐに、パッションフルーツを使って作った、少し酸味とくせのあるパウンドケーキをいただきました。

ボーガート家では牛や馬を飼っており、家のすぐ近くにある牛舎を見学させていただきました。丁度牛に注射をしている最中でしたが、ある一頭の牛が注射し終えたところで、注射をしていた男性が大きな鉄をもってきて、突然その牛に生えていた角を切り落とし始めました。角が長いと細菌が入り、病気になるから予防のためだそうです。予想外の出来事に驚きましたが、その牛は今まで聞いたことのないような鳴き声をあげ、必死に抵抗し、牛舎に帰った後も角から激しく血を流していました。かなり衝撃的で、印象に残りました。



出発前夜の食卓

午後はモーターバイクに乗せてもらい、ボーガート家の牧場を駆け巡りました。急斜面を高速で走り抜け、頂上に着くと牧場全体が見渡せて、とても気持ちよかったです。

この日は出発前夜だったので、同じステイ先の仲間と皆で稲庭そうめん、しじみ汁、日本茶を振る舞いました。箸やお椀など、和食に必要な食器が全てステイ先にそろっていて、驚きました。日本茶は、元来苦手だという方もいましたが、とても喜んでくれていました。また、箸の使い方や、そうめんの食べ方を教えることを通して、コミュニケーションをとることができたのでよかったです。

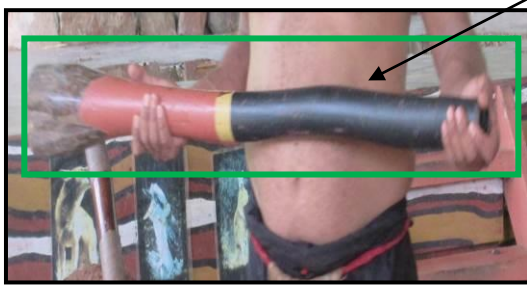
3日目

出発直前。ラッセル家に、折り紙でつくった鶴、舟、カメラ、ハート、そして四季折々の写真、英語でメッセージを書いた色紙をプレゼントしました。テーブルに美しく飾ってくれて、嬉しかったです。必ずまた会う約束をして、最後にハグでお別れしました。

ステイ先からロッジまでの道のりが、初日は長いと感じたのに、帰りはとても短く感じられました。短い期間でしたが、とても充実した楽しい2日間でした。

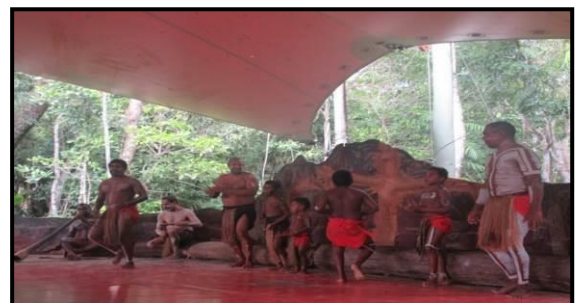
②アボリジニショー

レインフォレステーションというところで、オーストラリアの先住民「アボリジニ」に会いました。実際に槍を投げたり、「ディジュリドゥ」という楽器を吹いたりするところを見



せてもらいました。また、民族に伝わる掟やそれを破ったときの罰則について聞いたり、アボリジニショーを見たりもしました。アボリジニショーでは、「蚊のダンス (NGUKUN)」「沈黙の蛇 (PAMAGIRRI)」といった伝統的な舞踊を見ました。

大きな声で叫んだり、足を大きく踏みならしたりなど、かなり迫力がありました。



アボリジニショーのダンス

③オーストラリアで働く日本人へのインタビュー

レストランスタッフ 小島さん

Q なぜオーストラリアで働いているのか。

A 英語を使って仕事をしたかったから。他国の人はどんなことを考えているのか知りたかったから。

Q 英語力を向上させるためにどのようなことをしたか。

A ・どこかに友達と出かけるときに英語をたくさん使う＝自然と英語を使う環境が整う。
・映画を、日本語字幕無しで英語の音声だけで見る。→その英語を使ってみる。

Q コミュニケーション能力を向上させるにはどのようなことをすればいいのか。

A 言語の違いを怖がらないことが大切。逆にモジモジしていると相手がイライラしてしまうので、伝わらなくてもハッキリ言う。

OKギフトショップ 原田さん

Q 英語力を向上させるにはどのようなことをすればいいのか。

A 「使う」に限る。→英語を使う必要がある場所で使ってみる。

Q 日本とケアnzの生活の大きな違いはどんなことだったか。

A 人との接し方。挨拶などが日本のように重々しい感じではないこと。

株式会社日本旅行ケアnz支店 黒田さん

Q 英語力を向上させるためにどのようなことをしたのか。

A ・映画、会話で覚えたり、寝る前に辞書を1ページ読んだりした。
・趣味や好きなことを英語の雑誌などで読む。

Q オーストラリアにきてうれしかったこと。

A ・オーストラリアの友人が増えたこと。
・日本のいいところを発見し、それを伝えることができたこと。

ただ英単語を覚えるのではなく、実際に会話をすることによって、英語力、コミュニケーション能力を向上させることが可能だと分かりました。上の例を参考に、自分に合った方法でそれらの能力を身につけていきたいと思います。

5 研修を終えて

私はこの研修で、オーストラリアの広大な自然、人々のあたたかい心にふれることができました。また、ネイティブスピーカーと直接会話することで、生の英語を体感し、何とかして対応することで英語力、コミュニケーション能力が向上したと思います。初めて海外に行ったことで、日本のよさや課題を、オーストラリアと比較しながら見つけることもできました。

この素晴らしい1週間をおくることができたのは、大仙市教育委員会の方々、株式会社日本旅行の飛田さん、オーストラリアでお世話になった方々、そして家族のおかげです。この経験を今後の日常生活、そして社会のために生かしていきます。本当にありがとうございました。

オーストラリア海外派遣研修に参加して

No.11 西仙北中学校 2年 嵯峨 麗夏

1 はじめに

私は、自分の考えの視野を広げたいと思うとともに、自分の住んでいる地域に留まらず、もっと色々な世界や文化をこの目で見てみたいと考えていました。

また、幼い頃から英語に触れる機会に恵まれ、諸外国の方と関わるが多々ありました。この研修のことを知った時には、初めての海外ということで不安も大きかったのですが、好奇心の方が勝り絶好の機会だと感じ、参加させていただきました。

研究テーマ 「大仙市の豊かな環境を生かして、どのようなことができるだろうか？」

2 テーマ設定の理由

大仙市に限らず、日本全国に豊かな自然が溢れていますが、近代化に伴って自然破壊や環境汚染が進んでいます。そこで、自然破壊や環境汚染をすることなく、豊かな自然環境を活用して、どのような産業ができるかななどを模索し、大仙市の未来に生かしたいと思ったので、このテーマを設定しました。

3 研究内容と考察・まとめ

オーストラリアは、年間降雨量が600mm以下の地域が国土面積の80%を占め、特に乾燥している地域では、川も干上がってしまうほど深刻な水不足です。私のファームステイ先でも、様々な規則がありました。例えば、「シャワーは五分以内」、「蛇口を開けっ放しにしない」等々……。

現在は、下水をバクテリア分解し、綺麗な水にしてから再利用するという活動が行われており、水不足を解決するための取組も少しずつ進んできているようでした。

環境保護への取組については、オーストラリアで働く日本人の泰斗さんにインタビューしたところ、国土が広いので手入れが行き届かない所もあるが、絶滅危惧種の動物も生息することから、環境保護には力を入れているという話をお聞きすることができました。

具体的な取組としては、イベルメクチンやエチオンなどといった有毒性の低い農薬や殺虫剤を使うなどして、地域社会が一体となって環境保護に取り組んでいるらしいです。食品に残留する農薬、動物用医薬品等の最大残留基準値を定めるポジティブリスト制の歴史が長く、酪農乳業界でも厳守されてきました。日本もオーストラリアを参考にして基準を定め、ポジティブリスト制が実施されています。

また、渡航の際の持ち物にも厳しい制限がありました。これも、環境に配慮した考えの下に行われていることだそうです。美しい自然環境や動植物を守るための努力や、限りある資源を大切にすることを惜しまない国なのだと思います。

私の住む地域は農業が盛んです。今年度は、「国民文化祭」という一大イベントが行われ、観光客や他県から参加した方も多く、「秋田県」をアピールできるよい機会でした。

しかし、同時期に農家の稲刈りが行われていました。残念なことに、未だに「もみ殻焼き」はなくなってはいません。事実、観光客の来訪と重なっていた禁止期間にも焼いていたことから、私は、秋田のイメージが悪くなってしまわないかと心配せずにはいられませんでした。煙による臭いや視界の悪さによる交通障害など、環境、観光資源、健康を脅かすことになるのではないかと考えました。

農業は大仙市にとって重要な産業の一つですが、一方で、このような環境問題もはらんでいると思います。観光にも大きな影響が出るかもしれません。

オーストラリアも同じように農業や畜産、観光が盛んです。オーストラリアでは、小麦の殻などを土壌の肥料や家畜の飼料にするなど様々な工夫を凝らしているようです。

もちろん日本でも、もみ殻をペレットに加工し、ストーブの燃料とする取組は行われていますし、土壌の肥料にも利用していますが、まだまだ利用する手立てがあるのではないかと、工夫できることがあるのではないかと思います。産業廃棄物ではなく、新しい産業となる可能性を見出せたら良いなと思いました。

これらのことから、利便性を求めるだけの環境破壊や環境汚染をやめて、「自然と共存していく取組」に向け、一人ひとりが意識レベルを高め、国や地域が一丸となって取り組んでいくことが大切なのだと感じました。



ファームステイ先周辺



飼われている牛たち

4 エピソード

ファームステイ先では、毎晩マンゴーをそのまま使ったアイスが出てきました。ホストファミリーの方は、「Self-sufficiency（自給自足）」と言っていました。私たちのステイ先は、家と家畜のいる草原以外にはほぼ何も無いようなところで、買い物に行くのにも車で 20 分程かかるため、ほとんどの食料を自家栽培していました。

オーストラリアの食事としては、毎食肉中心の食事のイメージがあったのですが、意外と野菜が多い食事でした。逆に肉が出ることの方



ホストマザーの手作りスイーツ

が少なく、驚きました。しかし、他の家にステイした友達の話によると、その家では肉が多かったということでした。

また、オーストラリアで一番驚いたことは、間食が多いことです。日本だと、一般におやつとして、食べても一日に1, 2回程度しか食べませんが、オーストラリアでは、一日に3, 4回ほどおやつが出てきました。これらのことから、一回の食事の量、食事の回数の全てにおいて、日本の食生活とは異なることが分かりました。

様々な体験の中で最も印象に残っているのは、家畜である牛に注射を打っている時の様子です。注射を打つ時に牛が暴れるため、檻に閉じ込めて打っていました。更に、角が生えている牛は危険なため、麻酔もなしで角を切り落としていました。牛の悲鳴、流れ出る血液から、この時初めて角にも神経や血液が通っていることを知りました。少しかわいそうな一場面でした。



角を切り落とされた牛

マンガリーフォールズでは、オーギーキッズと交流する機会が設けられました。私たち派遣生の男子数名がその子たちと一緒に走り回って遊び始め、すぐに仲良くなっていました。オーギーキッズは積極的で、初対面の人にも物怖じせず話しかけ、すぐに打ち解けていました。日本人は消極的な人が多く、私もその中の一人だったので見習いたいと思いました。

ケアンズ市内では、オーストラリア名物のミートパイを食べ、街を散策しました。オーストラリアの治安が良いことは知っていましたが、海外だという不安もあり、少し緊張しました。

5 海外で働く日本人

海外で働く日本人にインタビューしてきました。まず、コミュニケーションのコツなどを伺うと、ジェスチャーを使って伝えようとする気持ちが大切だと教えていただきました。

また、日本との生活や文化の違いは、オーストラリアの人々は時間に拘らず、時間どおりに動くことがあまりないため、予定が狂うこともしばしばあるということをお話してくださいました。日本と比べてゆったりとした生活なので、どちらかというとせっかちな性格の日本人としては、慣れるまでに時間がかかるのかもしれないと思いました。

6 海外研修を終えて

最初は、自分の英語力で本当に意思が伝わるのか、不安でいっぱいでしたが、ホストファミリーの方と接するうちに、徐々に会話にも慣れてきて、ジェスチャーも交えながら楽しく話すことができました。私自身の伝えたかったことが上手く伝わった時は、とてもうれしかったです。言うことがよく分からない時は、かろうじて聞こえた単語を組み合わせて考えました。自分の英語力を更に高めるために、たくさんの英文を読み、勉強していきたいと思います。

また、日が経つにつれて他校の人とも積極的に話せるようになりました。たくさんの人と仲良くなり、毎日がとても充実したものになりました。英語に限らず、コミュニケーションの大切さが実感できました。

日本とオーストラリアの環境問題や文化の違いを知り、自分の身の回りの自然に対する環境保護

意識が高まり、日本文化の素晴らしさにも改めて気付かされました。自然、水資源に恵まれた日本・秋田・大仙をより良くするためには、学ぶべきことがまだまだありそうです。

最後に、今回の海外派遣研修が初めての海外渡航だったのですが、不安もすぐに期待に変わり、貴重な体験をすることができました。現地の方々からいただいた助言やメッセージを常に念頭に置いて、これからの生活に生かしていきたいと思います。

この研修に参加させていただいたことに心から感謝します。



オーストラリアで体験し実感したこと



№.12 西仙北中 2年 田口 輝

I はじめに

私がオーストラリア海外派遣研修に応募した理由は、日本と違う世界を見てみたい、今まで一度も体験したことがないことをやってみたい、日本ではできない体験をしてみたいと思ったからです。

また、昨年のお盆に見た「硫黄島からの手紙」という映画の中で、負傷したアメリカ兵と、元オリンピック選手だった日本兵との交流シーンが、とても印象的だったこともあります。言葉も文化も生活様式も違う人が、戦争の最中、しかも敵対する者同士でいながら、日本兵が英語を話せたお陰でコミュニケーションがとれ、ひん死のアメリカ兵が母親の写真をお守り代わりに持っていることを知り、母親を思う同じ人間同士として心を通わせるシーンでした。言葉が通じると、敵兵とも理解し合えることを教えられた映画でした。そのようなこともあり、この機会に是非自分の英語力、コミュニケーション力を試してみたいと強く思いました。

秋から始まった事前研修では、研究テーマにそって大仙市の建設部を訪れたり、オーストラリアの文化の勉強や英会話レッスン、税関の通り方等、様々なことを学習し、派遣に向けて準備をしました。派遣が決まった日からオーストラリアに行くまでの数か月間は、私にとって一生忘れられない素晴らしい体験になりました。これからその報告をしたいと思います。



II 研究テーマ/設定の理由



★研究テーマ★

日本の家の造りに必要なことは、何だろうか？

★設定の理由★

日本の家はその土地の気候に合った造りをしていると聞いたことがあります。オーストラリアでも気候に合った家の造りをしているのだろうか。そうだとしたら、どのような造りなのだろうか。

また、日本の家の造りで参考にできることはないだろうかと思い、このテーマを設定しました。

III 研究方法/調べた内容

★研究方法★

- 1 まず自分が住む日本の家の造りを知るために、大仙市の家や街づくりの特徴を、市の建設部に聞いてみる。
- 2 事前に質問用紙を準備して、ホストファミリーに記入して答えてもらう。
- 3 オーストラリアの家の造りや街並みを観察してみる。

★調べた内容★

1 大仙市の自然災害や環境に適した家や街づくりに関して（建設部の方のお話より）

①水害、風雪害、地震災害、土砂災害が起きているが、特に多いのが水害・雪害である。

※水害に対しての対策…河川の堤防の強化。堤防内に草を生やし、河川に土が流れ込まないようにしている。また、堤防の斜面はコンクリートで造り、人工芝等を使用して地震や河川の氾濫による崩壊を防いでいる。

※雪害に対しての対策…住宅街や河川敷に雪を寄せて置くスペースを確保している。融雪道路の設置の検討。幹線道路の除雪や中心市街地等の消雪施設の整備を進めている。中山間地域の集落の冬季の移手段の確保をしている。

②大仙市は木造住宅が多い。その特徴は、東京等の都市部と違い、家の骨組みが丈夫に造られていて、積雪や地震に強い造りになっている。

※木造住宅の長所…四季に対応した造りができる。

※木造住宅の短所…最近の木造住宅は耐久性が低い。

（昔ながらの木造住宅は耐久性が強い）

2 ホストファミリーへの質問とその回答

Q1 オーストラリアの気候の特徴は？

A:冬は暖かく乾燥している（乾季）。夏は高温で湿っている（雨季）。

Q2 オーストラリアに多い自然災害は何ですか？

A：火災（山火事・原野火災）、サイクロン（熱帯低気圧）・洪水。

Q3 その災害に対してどんな対策をとっていますか？

A:火災→スプリンクラーの設置。

サイクロン・洪水→物が流されたり、飛ばされたりしないように砂袋で押さえる。

Q4 オーストラリアの住宅は主に何の材料で作られていますか？

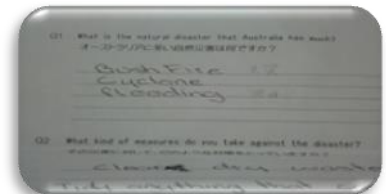
A:レンガまたはブロック、木材、スチール。

Q5 マンガリーフォールズの街で多い住宅の特徴は？

A:ブロックと木材。

Q6 この家は築何年ですか？つくりの特徴はありますか？

A:築30年。2階建てが特徴。



ファミリーへの質問用紙と観察して気付いた点

3 家のつくりや街並みを観察して気が付いたこと

①ホストファミリーの家は傾斜のある土地に建っていて、2階のテラスのような玄関から出入りし、私たちの部屋は階段を降りた1階にあった。着くまでに車窓から見た周辺の住宅は広い平屋の家がほとんどだったので、質問への答えにあるように、2階建ての住宅は珍しいのだと思った。

②住宅はとにかく広く、両側に大きな窓が設けられ、風通しをよくしてあった。また、住宅を囲むようにL字型に広いテラスがあり、日蔭を作って涼しくしていた。雨よけにもなっているようだった。エアコンは見かけなかった。

③泊まった部屋の天井隅をみると、レンガの壁に木の梁が架けられて、金具で留められていた。同じ方向に架かった梁の数が多いように感じた。

④雨どいが設置されていて、犬小屋の脇を通り地面にささっていた。敷地内の雨水を溜める大きなタンクに繋がり、その雨水が生活用水に利用されていた。

⑤街で見かけた公衆トイレの屋根が、ひさしの長い方形屋根になっていた。ホストファミリーの家は寄棟屋根だった。

⑥市街地でヒートアイランド対策として、屋上に木や草を植えているビルを見かけた。

⑦牧草地に風力発電の大きな風車があった。風が強い丘に設置して、街の電力を作っているようだ。



ヒートアイランド対策



風力発電の風車

★考察★

- ①私たちの訪れたケアンズ周辺は熱帯性で、夏（雨季）は気温が高く湿潤、冬（乾季）は温暖で乾燥した気候であり、主に1月から3月にかけて降水量が多くなる。ケアンズの標準的な日中の温度は、真夏は23～31度、真冬は18度となり、沿岸水域では、11月から5月にかけてサイクロン（熱帯低気圧）が時折発生する。日本のような四季はなく、雨季と乾季に分かれている。
- ②高温で湿潤な雨季への対策として、大きな窓を設置して風通しをよくしている。テラスを大きく取り、ひさしを長くして日陰を作り、家の中に少しでも涼しい風が入るようにしている。
- ③比較的雨が降るケアンズでも、乾季への備えとエコのため、屋根を寄棟屋根にして、降った雨が雨どいを通じ貯水タンクに効率良く集められている。
- ④レンガの壁は耐久性・耐火性・断熱効果に優れている。室内の温度と湿度のコントロールをしてくれるため、昼は室内を涼しく保つことができ、夜には室内を暖かくする。雨季の高温湿潤対策、乾季の火災発生時の防火対策になっている。しかし、上からの力には強いが、横からの力には弱いため、地震対策には向いていないようだった。

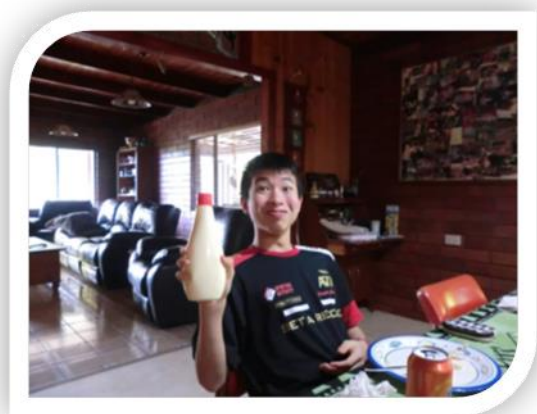
～以上のことから～

オーストラリアでも、やはり気候や風土に合った家造りが工夫されていました。最近の日本の家には少なくなった縁側、畳、障子等は、オーストラリアで見られたテラスやレンガの壁に似た役割をもっているのではないかと思います。最近の日本の家の造りにも、昔の家のよさが見直され、うまく取り入れられればよいのではないかと考えました。

建設部の方から聞いた、大仙市に豊富にある森林や田園環境を保全し、^(※)自然がもつ公益的機能を維持しながら自然エネルギーの活用をすれば、これからも自然と調和した生活ができるのではないかと考えました。

(※) 自然がもつ公益的機能とは大気清浄機能、二酸化炭素固定機能、生物育成機能など

↓ホストファミリーと“ももクロZポーズ”



↑なんと！豪州にも大好きなQマヨネーズ♪

～写真背景の家の造りもご覧ください～

IV エピソード

★ファームステイ先で★

ホストマザーのスーさんとホストファザーのグランさんはとても親切で、息子のダニエルさんと娘のクリスタルさんは私たちと一緒に遊んでくれました。スーさんは料理が上手で、食事がいつも楽しみでした。特に、手作りのバナナケーキがとてもおいしかったです。

ホストファミリーは、三匹の犬を飼っていました。ものすごく元気な犬たちでびっくりしました。中でもペッパーというメスの犬は、とても可愛くて、散歩に連れて行った時に私が名前と呼ぶと、ちゃんと振り向き、「Let's go!」と言うとちゃんとついて来てくれました。私の英語は、犬のペッパーにもちゃんと通じているようでした。



ステイ先の犬たち



ホストマザーの美味しい手料理の数々

日本男子白玉でお礼する↑

★ミコマスケイでのシュノーケリング★

ミコマスケイは、珊瑚礁に囲まれた美しい島で、「幻の島」とも呼ばれています。その幻の島ミコマスケイは鳥の聖地でもあり、鳥がたくさんいました。さすが世界自然遺産に登録されているだけあって、青い空と青い海と白い砂浜のコントラストが素晴らしくきれいな島で、とても感動しました。

私は男鹿の海にも潜ったことがあります。男鹿の岩場がある海もきれいなのですが、それとは全く違い、白い砂浜と珊瑚礁が広がる海でした。浅瀬にも大小様々な魚がいて、少し沖に行くと海底一面に広がる珊瑚礁も見ることができました。あまりの美しさに、日焼け止めがとれてしまったことにも気が付かず、ひたすら海に潜って楽しんでいました。

ラッシュガードを着てはいましたが……その日の夜の顔と腕の日焼けの痛さはハンパではなかったです。また、寝ようとして目を閉じても、そこにはまだミコマスケイの海の中が見え、夢でも海の中を泳いでいました。珊瑚礁の海は本当に美しかったです。



ミコマスケイへ向かう船上で



キュランダ村へ向かう列車内で

★海外で活躍されている日本人★

海外で活躍されている方々にインタビューしました。すると、ほとんどの方が、最初はまったく英語が話すことができなかつたとおっしゃっていました。そして、話せるようになるには、まず会話してみること。また、自分が好きなもの、例えば音楽や映画や漫画などから覚えるのもお勧めだと教えてくれました。

海外では、とにかく積極的に話すことが大事だと思いました。違いを怖がらず、目を見てアイコンタクトしながら話せばやがては通じ、フレンドリーな関係になれるそうです。私も英語がペラペラと話せたら……想像しただけでもワクワクしました。

V 海外研修を終えて

日本へ帰って来て、やっぱり世界は広がった！と感じています。

家族から、「行けば世界観が変わる。日本のよいところも出てくるし、人間というのは小さい存在だけれど、素晴らしいものであるということも分かる。世界は広い！行くと実感できる。」と言われていました。全くその通りでした。自分が知らない世界は、自分の目で見てみると分かりません。オーストラリアの人の親切、自然の雄大さ、逆に日本の素晴らしさ、自分の英語力・コミュニケーション力等々、新しい価値観を見つけることができました。この貴重な体験で得たもの、吸収したことを忘れることなく、自分の将来、大仙市の将来、日本の将来に少しでも役立てることができたらと感じています。

そして最後に……私はオーストラリアに到着するまで、税関を通るのがとても恐ろしかったです。なぜかという、お笑いの中川家のものまねネタである「グアムの税関」のような人が、本当にいると想像していたからです。怖い顔で、スタンプをバンバン押しながら「Sightseeing?」と聞かれたら、どう答えようとドキドキしていました。が、実際に通った税関の係の人は、ごつい体つきでしたが、何も聞かれることはなく、スタンプを押すとすんなりと通してくれました。これも実際に行ってみないと分からないことの一つでした。

今回オーストラリア研修に参加させていただいたことを本当に感謝しています。また海外に行けるチャンスがあれば、是非行きたいと思います。ありがとうございました。



オーストラリアで学んだこと

No.13 西仙北中学校 2年 寺山 莉奈

I はじめに

私がオーストラリアへの海外派遣に応募した理由はたくさんありますが、大きい理由は次の二つです。

一つは、私は将来仕事をする際、世界の人々としっかり話せる社会人になりたいと思っていることです。そのために、もっと自分の英語力を高めたいと思いました。これを機会に、外国で自分の英語がどれだけ通じるかを知り、これからの自分の課題を見つけたいと考えました。

もう一つは、去年の夏に韓国の中学生在が私の家にホームステイしたことです。その時は、緊張もあり、自分からあまり会話をすることができませんでした。だから今度は、私がオーストラリアに行き、一緒に行く仲間やホストファミリーに積極的に話しかけ、コミュニケーション能力を高めたいと思いました。

II 研究テーマ

～身近な食材を使って作られる料理には、どんなものがあるのか？～

〈テーマ研究の理由〉

私は、オーストラリアの食文化についてとても興味がありました。特に、食材や料理の内容についてです。私たちの住む秋田県、大仙市では、強首白菜、まがりねぎ、枝豆など、たくさんの農作物が作られ、食べられています。それらと同じ食材はあるのか、食べ方は同じなのか、ということ比べて私たちの食文化に生かしたいと思いました。

III 研究方法、調べた内容

- 1 ファームステイ先での食事（ある一日の食事）の記録
- 2 ホストファミリーへのインタビュー

まずは、ファームステイ先について紹介します。

私は、牧場を経営しているVoss（ボス）さんのお宅にファームステイをしました。家族構成は、ご主人のHansさんと妻のMaritaさんです。私たちに、「Papa」、「Mama」と呼んでねと言ってくれました。

Vossさんの家では、多数の牛や鶏を飼っていました。そのほとんどを肉にしてスーパーなどに売り、その一部は家で食べているそうです。レタスやネギなどの野菜は、家の隣の畑で育てられていました。また、家の敷地内には、バナナやスターフルーツなどの果物も生育しており、基本的にはこれらの食

材を使って、自給自足の生活をしていました。

調べた結果は、次のようになりました。

1 ファームステイ先での食事（ある一日の食事）の記録

朝食



- ・パンの上にトマト、チーズ、ハムを載せたもの
 - ・スクランブルエッグ
 - ・ソーセージ
 - ・オレンジジュース
- ※サラダなし

昼食



- ・チキンスープ（ブロッコリー、パプリカ、カリフラワーなどの野菜入り）
 - ・アップルジュース
 - ・ソーセージ
- ※パン、サラダなし

夕食



- ・ハンバーグのようなもの
 - ・牛肉を煮たもの
 - ・オレンジジュース
 - ・そうめん（私たちが茹でたもの）
- ※パン、サラダなし

2 ホストファミリーへのインタビュー！

ホストマザーにインタビューをしました。

Q：普段の生活では、どのような料理を作っていますか？

A：昼食は、ソーセージを焼いたり、牛肉を焼いたりします。夕食は、肉をメインとして、いろいろな調理方法で作っています。

Q：お客様が来たときは、どのような料理を出していますか？

A：私たちが毎日食べているような料理を出しています。

Q：どのようにして牛肉や鶏肉にしますか？

A：にわとりは首を絞め、牛は頭を銃で打ちます。



肉がメインの食事

3 考察

オーストラリアと秋田県、大仙市の料理を比べてみると、オーストラリアの料理は肉がメインになっていて、私たちの食事に比べると野菜がとて少なかったです。また、オーストラリアの主食は、パンやシリアルでした。

地産地消の生活については、家の近くの畑で野菜を育てていることは私たちと同じでしたが、肉類もほぼ地産地消できていることには驚きました。ステイ先では、自分で育てた鶏や牛を肉にして、色々な方法で調理して食べていました。また、右の写真にあるように、肉を干すなど、保存の仕方も工夫しているようでした。

このように、オーストラリアのマンガリー地区は気候の関係もあると思いますが、私たちよりも自給自足、地産地消がすすめられていると思いました。



家の近くの野菜畑



干して加工されている肉

一方で、秋田県や大仙市の料理は米が主食で、和食を中心に、多くの野菜を使ったたくさんの種類の料理が食べられています。

今回オーストラリアに行って、自分ちの食事は地域でとれる食材を使い、バランスのよい食事になっていることがわかり、改めて日本の食文化のよさを知ることができました。給食についても同じです。地産地消でバランスのよいメニューになっていることに感謝していただきたいと思いました。

また、これからはもっと大仙市でとれる強首白菜やまがりねぎなどの農作物を使って、その食材のよさを生かしたたくさんの料理を作って、多くの人にPRしていけたらよいとも思いました。

さらに、私は大仙市産、県内産の肉や魚の知識が野菜の知識より少ないので、それらについてももっとよく知り、地産地消についてしっかりと考えていきたいです。

IV エピソード

1 ファームステイでの生活

私たちがお世話になったVossさんの家は、以前にも日本人やドイツ人など、たくさんの外国人を受け入れていたそうです。そのせいか、たくさんの国からのお土産がありました。

Papaは、いろいろな滝を見に連れて行ってくれました。右の写真は、Papaと一緒にいった滝のひとつです。とても迫力がありました。その他にも、もう二つの滝を見ました。

Mamaは私たちをスーパーマーケットや雑貨屋さんなどのショッピングに連れて行ってくれました。また、毎晩私たちとゲームをしてくれました。かなりドキドキするゲームでしたが、とても楽しかったです。

私たちは、最後の日の夕食は、私たちがそうめん料理を作ってあげました。とてもおいしそうに食べてくれてうれしかったです。Papaは、そうめんが気に入ってくれて、たくさん食べていました。

このように、滞在中はPapaもMamaも、とても優しく接してくださいました。



2 オージーキッズ（現地の子供たち）との交流

オージーキッズといろいろなゲームをして、触れ合いました。

夕食も一緒に食べました。食べながら、年齢を聞いたり、英語で会話をしたりしました。今まで、習ってきた単語や英文を使って話すことができ、とてもうれしかったです。

食後は、みんなで踊りました。また、双方から出し物を出し合いました。私たちは、「ようかい体操第一」を踊り、「アナと雪の女王」の「ありのまま」を歌いました。オージーキッズが、「ようかい体操第一」を一緒に踊ってくれました。私たちのマネをして、上手に踊っていたので、びっくりしました。

最初はオージーキッズと仲良くできるか不安でしたが、とても親しくなることができました。とてもよい思い出の一つになりました。

3 フィッシュ&チップスを食べました！

私は生まれて初めて、オーストラリアでポピュラーな料理のフィッシュ&チップスを食べました。魚を揚げたものと、ジャガイモをフライドポテトのように揚げたものでした。タルタルソースのようなものに付けて食べました。とてもおいしかったです。またいつか、オーストラリアに行って食べたいです。



フィッシュ&チップス

4 海外で活躍している日本人

オーストラリアには、たくさんの日本人が働いており、その中の何人かにインタビューをする機会がありました。ここでは、ケアンズ市内のショップで働いている原田さんにインタビューしたことを紹介します。

Q：どうしてオーストラリアでこのようなお仕事を始めようと思ったのですか？

A：理由は、海外で仕事をしたいと思ったことと、海外で子どもを育てることで、子どもの環境を変えてあげたいと思ったからです。

Q：働くときに大切にしていることは、何ですか？

A：なるべく人の目を見て話すようにしています。

Q：日本に帰りたと思ったことはありますか？

A：ありません。でも、日本は好きです。

〈感想〉

たくさんのインタビューに答えていただきとてもうれしかったです。オーストラリアでの生活は、いろいろなことがあるようですが、とても楽しいそうです。

コミュニケーションのとり方など、普段の生活でも役立つ情報があったので、活用してみたいです。他にも、たくさんのことを教えていただきました。

原田さんだけでなく、たくさんの日本人にインタビューをし、たくさんのことを学ぶことができました。とても感謝しています。

V 海外研修を終えて

私は、オーストラリアに行く前は不安な気持ちでいっぱいでしたが、たくさんの人のおかげで、そんな気持ちもなくなり、とても楽しく研修することができました。

最初は、オーストラリアの人々としっかり英語で話せるかとても心配でしたが、ファームステイ先でも、オージーキッズとの交流でも、簡単な英語を使ったり、ジェスチャーを使ったりして、何とか伝えることができました。前よりも英語に自信をもてた気がします。

今後は、オーストラリアでの体験を学校の友達にたくさん伝えていき、オーストラリアで身に付けた英語力を学校の英語の授業でも積極的に使っていきたいです。

オーストラリアでは、貴重な体験をたくさんして、様々な思い出をつくることができました。
このような貴重な機会を与えてくださった教育委員会のみなさんや中学校の先生方、そして陰で支えてくれた家族にとっても感謝しています。

ありがとうございました！



オーストラリアの暮らしについて

No14 中仙中学校 2年 吉川 康太

I はじめに

僕の家族は、僕が小さい頃にホストファミリーをしていました。その後、家族でその学生さんに会いに行ったこともあります。そのときはまだ英語が喋れずに、英語を話す外国人は怖いと思っていました。でも、英語の塾に通ったり、学校で英語の授業を受けたりしているうちに英語に興味をもち、今度は一人で外国に行きたいという気持ちが高まってきました。そして、その国の文化や生活についても実際に行って、見たり聞いたりしたいと強く思いました。

今回、英語圏のオーストラリアに行くことで、自分の目標に一步近づくといい、この研修に参加させていただきました。

○研究テーマ

『地産地消を活性化するにはどうすればよいか？』

II テーマ設定の理由

秋田県は農業が盛んで、食料自給率は178%ありますが、オーストラリアはそれ以上の187%もあります。ぼくは、オーストラリアでの地産地消の様子や、各家々での自給自足の割合はどのようになっているのかということに興味をもち、この研究テーマに決定しました。

III 研究方法/調べた内容

研究方法

- ・その家の自給自足の割合と、ステイ先周辺での地産地消の様子をホストマザーにインタビューする。
- ・どのような商品が地産されているのか、店に行って調べる。

調べた内容

ホストマザーに「この家の自給自足の割合はどのくらいですか？」と質問した結果、50%くらいであることがわかりました。自給自足されているものは、牛肉、鶏の卵、鶏肉、野菜などだそうです。

それから、店に行って調べてみたところ、野菜や果物など、ほとんどの商品が現地でつくられていることがわかりました。



←ステイ先の牧場



調べに行った店→

Ⅲ 考察

オーストラリアは、日本に比べて地産地消に対する意識が高いと思いました。僕のステイ先では、食事のとき出されるものは、そのほとんどが家で育てられたものでした。でも、日本では、そのように自分の家で育てて食べるということはあまりないと思います。それに、日本人皆が牧場や農場を持っている訳でもありません。だから、自給自足を行うことは、日本では難しいと思います。

僕が行ったオーストラリアの店では、ほとんどの商品が現地でつくられたもので、地産地消が活発に行われていることを感じました。大仙市でも、スーパーや道の駅などで、地産地消コーナーをよく見かけることがあります。オーストラリアのスーパーと同じように、地産地消コーナーがあることはよいと思いますが、その規模はまだまだ小さいと思います。だから、秋田県の農作物を県内で消費するだけでなく、県外にももっと売り出せばいいと思います。そうすることによって、県外に秋田県をアピールすることもできると思います。

そのためには、秋田県の農作物についてもっと知り、自分で食べて地元の農作物のよさをたくさんの人に伝えることができるようになりたいです。そして、大仙市のよさとして宣伝していくことができたらいいと思います。

Ⅳエピソード

1) ファームステイにて

僕のファームステイ先には、牧場がありました。牧場は家から離れていて、車で移動して見に行きました。その牧場が右の写真です。ここでは、牛が家畜として飼われており、その広さにとても驚きました。



ステイ先の広大な牧場



明るく料理上手なホストマザー

左の写真の人は、ホストマザーのグラディスさんです。グラディスさんは、一日中元気で明るく、そのお陰でホームシックになりませんでした。また、料理がとてもおいしくて、ステイ中の食事が毎回楽しみでした。

右の写真の人は、ホストファザーのジャックさんです。ジャックさんも、とても元気で、仕事に一生懸命な方でした。



肉牛育成に研究熱心なホストファザー



このバギーに乗って散策

ホストファザーには、敷地内をバギーに乗せてもらって散策して楽しみました。牛が追いかけてきたり、もの凄いスピードになったりして、とてもワクワクする経験をしました。

2) オージーキッズとの交流

ファームステイの後は、オージーキッズとの交流がありました。オージーキッズは喋るのが早くて、聞き取りが難しかったですが、イカダ作りなどのアクティビティを通じて交流できました。夜は、一緒にダンスをしたり、歌やダンスを披露し合ったりしました。バーベキューも楽しみました。右の写真は、その時食べたものです。



皆で食べたバーベキュー

3) 海外で活躍している日本人

僕がインタビューしたのは、ケアンズ市内で働いている原田さんです。原田さんがオーストラリアに来た理由は、外国で生活、仕事をしたいと思ったから、そして、子供を海外で育てたいと思ったからだそうです。僕は、原田さんにいくつかインタビューしました。

Q：オーストラリアと日本の違いは何ですか？

A：オーストラリア人は人の目を見て話します。日本人はシャイであり目を見て話しません。目を見て話すのはオーストラリアでは当たり前で、印象も良くなると思います。

Q：生活していて困ったことはなんですか？

A：時間にルーズな人もいて、約束ごとをしても時間どおりに来ないことがあります。それから、日用品が壊れやすいことも大変です。

感想

原田さんとその家族が楽しく海外生活をしていることを聞いて、僕も海外で仕事や生活をしてみたいと思いました。そして、もっと海外について知りたいと思いました。

V 海外研修を終えて...

今回この研修を終えて、自分の知らなかったことがたくさんあることに気づき、もっとたくさんの国に行ってみてみたいと思いました。そして、大仙市の水や米など、自然や食べもののよさを実感し、地域の良いところについて改めて知ることができました。

オーストラリアにて・・・

No.15 豊成中学校 2年 相馬啓人

1 はじめに

私がこの海外派遣に応募しようと思った理由は二つあります。一つ目は、異文化に興味があったことです。私たちの暮らしとオーストラリアの暮らしは、何がどう違うのかを知りたいと思いました。二つ目の理由は、自分の英語が海外でどのくらい通じるのかを試してみたいと思ったからです。中学校で普段勉強している英語が、実際にはどのように使われているのか、また自分ではどのくらい使うことができるのかを、自分の身をもって体験したいと思いました。

2 研究テーマ//テーマ設定の理由

私は今回の研究テーマを、「環境保護への取り組み方はどうあるべきか？」と設定しました。私の通っている豊成中学校では空き缶回収が学校の伝統行事になっているほどボランティア活動が盛んです。しかし、ボランティア活動が盛んとは言っても、通学路や道端にはゴミが落ちていることがしばしばあります。クリーンアップ活動やボランティア活動に取り組んでいても、ゴミはなかなか減りません。そこで、文化や習慣の違うオーストラリアでは、どのようにゴミの処理やリサイクルを行っているのかを知りたいと思い、このテーマを設定しました。

3 研究方法//調べた内容

(1) 研究方法

テーマに迫るために、ファームステイ先の家族にインタビューしました。また、ファームステイ先ではどのようにゴミを処理しているかを観察しました。

インタビュー内容・・・

① オーストラリアの自然を壊さない工夫は何ですか？

・自然を愛し、質素な生活様式を愛しているから、自然や動物を大切にすることにつながっている。

② オーストラリアでは、ボランティア活動やクリーンアップ活動は行っていますか？

・私たちは皆、自分たちの国を美しく保つために協力して取り組んでいる。自分の国のためなら協力することを惜しまない。

③ 僕たちが暮らしている秋田県大仙市でもボランティア活動をしています、なかなかゴミは減りません。何かアドバイスをください。

- ・リサイクルと適切なゴミの処分を促進するための運動を行うなど、みんなに参加できるようなクリーンアップデイを、もっと多く設けるべきだと思う。

さらに、ステイ先である Ross(ロス)家でのゴミ
に対しての取り組みを観察したところ……

(右の写真は Ross家のゴミ箱です。) ⇒

家庭内にはゴミ箱の量がたくさんありました。そこで、オーストラリアのゴミ処分についてたずねたところ、まず分別をしっかり行っているということでした。



「生ゴミ」と「その他のゴミ」に分別し、「生ゴミ」は家畜やペットのえさにされます。

「その他のゴミ」というのは、ビンやプラスチック類、缶のことです。これらは、ほぼ、ゴミに出されます。この写真ではペットボトルが捨てられていますが、よく見ると、キャップの色が違うのに気づきましたか？これは、販売している会社が違うだけでなく、色によってリサイクルができるのかできないのかわかる仕組みになっています。

- ※ **赤いフタ**・・・リサイクルできないゴミ
- 黄色いフタ**・・・リサイクルできるゴミ

<考え>・・・



草を食べる牛

オーストラリアの人々は、愛する母国の環境を守るために、自然や動物を大切にしていました。豊かな自然を壊さないように、一人一人が環境・自然に対する意識を高くもち、ボランティア活動に積極的に参加していました。他の人と協力し、将来にわたってオーストラリアの環境・自然を保つように努めていることは、とても素晴らしいことです。私は、大仙市でも環境への取り組み方の意識を、一人一人がもっと向上させていく必要があると思いました。



広大な自然

4 エピソード

<ファームステイ編>

ファームステイでは、Ross家にお世話になりました。3泊の予定でしたが、飛行機が1日遅れたので、宿泊は2日間と短くなりました。でも、その2日間は、とても楽しいものでした。Ross家のお母さんであるスーさんは、私たちを色々な場所へ連れって行ってくれました。

そんなファームステイで印象的だった出来事を、ランキングで3位から順に紹介します。

<3位>～ナチュラルパーク～

下の写真の場所はナチュラルパークといい、自然が豊かな公園です。虫や鳥がたくさんいました。とても広い場所を約1時間歩きました。初めて見る動植物がたくさんあり、おもしろかったです。僕にとって心が落ち着く、好きな場所でした。



ステイ先の仲間と



ナチュラルパーク

<2位>～スタミナ料理！～

私は、オーストラリアではどんな食事をしているのか、一度食べてみたいと思っていました。実際には、とてもボリュームがあり、食べきるのが大変でした。また、驚いたことに、Ross家の皆さんは食後にコーヒーや紅茶を毎日必ず1杯ずつ飲んでいました。私たちもいただきましたが、自分にとっては本当に驚きでした。たぶんオーストラリアの習慣なのだろうと思いました。



チーズたっぷりのパスタ



大きなホットドッグ

<1位>～Ross家とのふれ合い～

お世話になった Ross家の人たちとは、話をしたりゲームをしたり、一緒にテレビを見たりしました。自分の家族と普段しているのと同じ日常なことなのですが、それが一番楽しかったことでした。Ross家の皆さんは、とても優しく性格も明るい方ばかりでした。私たちのことをいつも心配し



てくれて、わからないことは丁寧にジェスチャーを使いながらわかりやすく説明してくれました。またいつか会いたいです。

<オーストラリアで働く日本人編>

オーストラリアのレストランで働いている小島さんにインタビューをしました。

Q オーストラリアに来ようと思ったきっかけは？

A 将来英語を使ってお客さんと話す仕事に就きたいと思ったのがきっかけです。そのきっかけを作ったのが、大学の時に旅行で泊まっていたバリ島のホテルの従業員の方。その方が楽しそうに働いているのが印象的で、自分もホテルやレストランで働きたいと、「**本気の決断**」をしました。

Q 勉強はいつしましたか？

A アルバイト（現在の仕事）をやりつつ学校に通っていました。

勉強は自由でしたが、仕事は責任をもってやらなければなりません。仕事で外国人に話しかけられたときのために、しっかり勉強しました。職場でわからなかったフレーズをメモして、次の日の会話の中で使ったり、家では英語版のドラマなどを見て会話文を覚えました。勉強するときに大切なことは、わからないことに対して決してわかったふりをしないことです。

<感想>

小島さんにインタビューをして、海外で働く魅力を改めて知ることができました。海外で仕事をするためには、勉強をたくさんして、英語を自分のものにすることが大切です。外国人とのコミュニケーションは難しいのですが、しっかり勉強して努力することの大切さを教えていただきました。

5 海外研修を終えて・・・

この研修を終えて、私はどんなことにも逃げずにチャレンジすることの大切さを感じました。特に、コミュニケーションを積極的にとることの大切さを学びました。自分の英語はどのくらい通じるのか最初は不安でしたが、自分の思ったことを相手に伝えるために、失敗を恐れずに挑戦（チャレンジ）し、たとえ英語がカタコトでも、発音が悪くても、ジェスチャーなどで工夫して自分の力で表現して気持ちを伝えることを頑張りました。何事もやってみることが大切だと改めて感じました。

オーストラリアの暮らしを体験し、その自然の素晴らしさや温かい人々の心に感動しました。日本とはまったく違った文化・暮らし・言葉などに触れ、貴重な体験をさせていただくことで、日本もオーストラリアを手本として、環境問題に取り組む必要があることを実感できました。私も自分にできることから始めていくつもりです。そして、次にオーストラリアに行く機会があれば、現地の人々と今回以上に交流できるようになりたいです。



グレートバリアリーフの青い海

海外派遣研修報告書

No.16 豊成中学校 2年 高橋元気

<はじめに>

僕がこの海外派遣研修に参加したいと思った理由は、以前いところがこの研修に参加していて、いつか自分も・・・と思っていたからです。また、以前から海外の生活や文化などに興味があり、自分の英語力やコミュニケーション能力を試したいとも考えていました。

<研究テーマ>

僕の研究テーマは、「地産地消を盛んにするにはどうすればよいか?」です。このテーマにした理由は、「食文化」や「地産地消」に興味があったからです。オーストラリアの食文化や地産地消に関することを知り、自分が住む大仙市の食文化や地産地消について、さらに理解を深めたいと思いました。



ロッジで食べたバーベキュー

<研究内容>

地産地消について

僕が滞在した家庭では、牛と鶏を飼っていて、畑ももっていました。牛からは肉と牛乳、鶏からは肉と卵を得ていました。畑では、人参やマンゴーなどの野菜や果物を育てていました。この地域ではマンゴーの生産がとても盛んで、滞在中に食べることもできました。自分の家で育てた野菜や果物は、基本的に自分の家で食べるそうです。このことから、オーストラリアでは自給自足が即ち地産地消となっている家庭が多いと考えられます。牛や鶏は、肉や牛乳として加工したり、卵を売ったりして生計を立てていると伺いました。



ステイ先の牛たち

大事な収入源 肉牛 について

僕が滞在した家庭では、約 647,500 m²の果てしなく広がる農地に、約80頭の肉牛を放し飼いにしました。牛は、広大な農地で放し飼いをすることで、健康な牛になるそうです。さらに、草原で飼うため餌代を浮かせることができるということでした。



はるかに続く農地



ケアンズ市内の市場

市場にて

市場で店員さんに質問をして、現状を知ることができました。僕が行った市場では、ほとんどの野菜や果物が地元産でした。販売しているものがすべて地元産という店もありました。ある店には日本産の野菜もあり、とても驚きました。日本の農産物が、広大な土地を利用したオーストラリアの農産物に負けない品質であると認められていることを改めて知りました。

まとめ

オーストラリアと日本では、土地の広さや気候が全く違っていました。オーストラリアは土地が広く、年中温暖な気候であるのに対して、日本は土地が狭く、四季がはっきりとしているため、農業の仕方や食文化も違っていました。オーストラリアでは牧畜が盛んで、農産物として野菜から果物まで幅広い分野の作物を作り、その生産量も多かったです。日本で同じような農業をするには、限界があると思います。だから日本は、品質の高い作物を作ることが重要だと思いました。

地産地消についてまとめると、オーストラリアは地域ですすめられていることはもちろんですが、各家庭での自給自足を行っている割合も高いということがわかりました。日本では、各家庭での自給自足の取組は、どうしても無理があるので、地域ごとに農業を六次産業化（生産から消費までの一連の流れ）して、地産地消を進めていったらいいと思いました。



ファームステイしたボーガート家

<エピソード>

ファームステイ

今回僕は、ボーガートさんという方のお宅に3日間滞在しました。日本ではできない貴重な体験をたくさんさせていただきました。トランポリンなどの遊具で遊んだり、バスケットボールや卓球をしたり、バギーに乗って農場を駆け巡ったり、牛の注射や消毒も見たりしました。ほかに心に残っていることは食事です。間食の量が多いため、1日5食を食べているような気分でしたが、どの料理も美味しかったです。



庭にあるトランポリン



ミコマスケイの海

ミコマスケイ

今回、初めて世界遺産のグレートバリアリーフ（サンゴ礁）を見ました。この体験で自然の偉大さを改めて感じました。日本では見ることはできないものを見ることができて嬉しかったです。この島自体、とても迫力がありました。このミコマスケイは、通称「鳥の島」です。島の面積の9割が鳥の生息区域のため、人間は立ち入り禁止となっていました。

時間を忘れて泳いだせいか日焼けがひどく、とても痛かったです。

オージーキッズとの交流

マンガリーでは、僕たちよりも年下の子供たちと交流しました。筏作りやバーベキュー、ダンスなどをしました。片言の英語とジェスチャーで何とかコミュニケーションをとり、会話することができました。体をたくさん動かして楽しんだ一日でした。



ここまで紹介したものの他にも、キュランダ溪谷鉄道やアボリジニショー、アーミーダッグなどを体験しました。どれも、忘れることができない思い出です。

<海外で活躍している日本人>

今回の研修では、オーストラリアで仕事をしている6人の日本人の方にインタビューすることができました。インタビューしてみると、全員に共通している点がありました。それは、努力です。オーストラリアに来たきっかけはそれぞれ違いますが、何かしらの努力をしているから、ここまでに至っているのだと感じました。主に英語を習得するための努力でしたが、方法としては色々なものがありました。一番心に残っている方法は、好きなもの、興味のあるものから英語訳していくというものです。無理なく、楽に自然に覚えるという方法でした。僕も好きな歌や小説などから徐々に覚えていきたいです。

改めて努力の大切さを知りました。

<海外研修を終えて>

今回の研修では、たくさんのことを学びました。特に挑戦するということに心がけて取り組みました。まず、この研修に応募するという時点で、挑戦は始まっていたと思います。そして外国に行く、外国人と会話をする、仲間と協力して何かをやり遂げる、などの挑戦もしました。僕は、この研修に挑戦して本当に良かったと思います。今回の素晴らしい体験は一生の思い出です。そして、この研修に関わってくださった方々に感謝したいと思います。今回オーストラリアに行って学んだことを、今後の自分の生活に生かしていくことはもちろん、未来の大仙市のために生かして貢献したいと思います。



ホストマザー、ステイ先の仲間と

オーストラリアで学んだこと

NO.17 協和中学校 2年 柳館沙耶

I はじめに

私がこの研修に参加しようと思った理由は二つあります。一つ目は、日本にはない文化を現地で体験したいと思ったからです。本やテレビで見ている、日本とは全然違う文化を、実際に体験してみたいと思いました。二つ目は、将来に生かせると思ったからです。私は、将来外国と交流のある仕事、英語を使う仕事に就きたいと思っています。だから、この研修で英語でのコミュニケーション能力を高めて将来に生かしたいと思いました。そして、英語のコミュニケーションで大切なことを知ろうと思いました。

II 研究テーマ

私の研究テーマ

『伝統的な文化を引き継いでいくために、私たちにできることは何か？』

大仙市には、伝統的な文化があります。例えば、刈和野の大綱引き（国指定重要無形民俗文化財）、国見ささら（県指定無形民俗文化財）、横沢ささら（市指定無形民俗文化財）や各地域で行なっている小正月行事など、様々な行事があります。しかし、後継者不足という問題があります。

オーストラリアにも伝統的な文化があるので、私はどのようにして引き継いでいるのか調べることにしました。

III 調べた内容

1 食文化について

私は、オーストラリアといえば、先住民のアボリジニしか思い浮かばなかったのですが、今回の研修で一番印象に残ったのは食文化でした。毎食、肉料理が出てきました。野菜の量はあまり多くなくてお肉の量はとても多く、ファームステイ先の料理を食べるのが大変でした。ホストマザーに教えてもらったのですが、オーストラリアの人は、お肉がとても好きだそうです。だから毎食、肉料理が出てくるそうです。そのほかにも、ホストマザーの好きなオーストラリア独自の食べ物を教えてもらいました。・BBQ（バーベキュー）・Meat Pies（ミートパイ）・Fish and chips（フィッシュ&チップス）・Tim Tam（チョコビスケットの菓子）・Pavlova（ケーキ）この五つが特に好きだと言っていました。Tim Tam と Fish and chips は、私も食べました。日本のものとは違う美味しさがありました。

(ファームステイ先の料理)



(Fish and chips)



2 アボリジニについて

(1) 文化

アボリジニはオーストラリアの一番初めの住人で、オーストラリアの先住民です。ブーメランを使って鳥を捕まえたり、ヤリを使って遠くのものをつまめたりする狩猟民族だそうです。部族に分かれていて、部族のおきてや部族同士の争いもあるそうです。ブーメランは、一度に3枚ほど投げるそうです。鳥の群れが来たら、大勢の人が一斉にブーメランを投げ、効率よく大量の鳥をつまめるそうです。ヤリの持ち方は3種類あり、真ん中や後ろを持ったり専用の器具を使ったりするそうです。投げる距離により持ち方を変えていて、真ん中は近いところ、後ろは少し遠いところ、専用の器具はとても遠いところ、と調節しているそうです。そのほかにも、部族のおきてを破った人への罰を与えるためのものとしても使われるそうです。また、ディジュリドゥという管楽器があり、吹き方は笛のように唇を震わせて舌で音を調節するそうです。音を調節して、動物の鳴き声をまねすることもできます。他部族が攻めてきたときに警戒を促したり、戻らせたりする時にも吹きます。以上、ここで挙げたブーメラン、ヤリ、ディジュリドゥの三つは、アボリジニのダンスでも使うそうです。

(2) 伝え方

アボリジニの文化は、キュランダというところで体験することができました。ここには、アボリジニの方々が大人から子供までいました。私も、ブーメランを投げてみたのですが、うまく投げるできませんでした。ダンスもここで見ることもできるのですが、最後には、希望者がダンスを少し教えてもらうことができます。この場所以外で、アボリジニの方に会う機会はありませんでしたが、ブーメランやディジュリドゥ、お土産用のグッズが買えるところは空港だけではなく、街中にもたくさんありました。



(アボリジニのダンスショー)



(空港内のお店)

3 考察

町の中に、アボリジニ文化に関するお店がたくさんあることにとても驚きました。大仙市では、このようなお店はあまりありません。また、伝統文化を紹介する施設はあっても、体験できる施設はないので、実際に綱引きなどを体験できるところがあるとよいのではないかと思います。施設としてではなくても、疑似体験会などを設けて、他地域の人でも気軽に楽しめるようにするのもよいアイデアだと思います。

さらに、私たち中学生が伝統文化等について家族や地域の方々に教えてもらい、それを周りの人々に広めていくことはできると思います。そのようにして多くの人に伝え続けていくことが、伝統的な文化を引き継いでいくために私たちができることではないかと思います。

だから私は、このことを実行できるようにしたいと考えています。

IV エピソード

1 ファームステイ

私は、VOSS 家へファームステイに行きました。VOSS 家のパパとママはとてもフレンドリーな方々で、安心しました。ファームには動物がたくさんいて、植物もたくさん植えられていました。日本ではなかなか見ることのできない植物も植えられていました。パパとママは、もともとはドイツの方だそうで、ドイツ語と英語の載ったとても分厚い辞書とボードゲームがありました。夜にこのゲームをしたのですが、とても盛り上がり、楽しい時間を過ごせました。

2日目の夕食で、私たちが持って行ったそうめんを作って、食べてもらいました。私も、久しぶりの日本食でいつもよりもおいしく感じました。パパとママもたくさん食べてくれました。その後、たくさんいる動物の中の1匹、インコのデージーを肩に乗せました。爪がとてもいたかったけれど、あまりできない新鮮な体験でした。



(パパとママです。そうめんを食べています)



(インコのデージーです。カメラ目線?)



(室内プールもありました。)



(スターフルーツも育てられています。)



(ボードゲームは、ルールが難しいです。)



(ティータイムのケーキです。)

2 海外で活躍している日本人

私は、最初に行ったマンガリーフォールズで働いている方々、ケアンズで働いている方々に話を聞くことができました。オーストラリアへ来た理由は、

- ・ 社会人として日本ではやっていけないと思ったから
- ・ 自分の人生の見直しと人生の冒険
- ・ 英語が好きだから
- ・ 外国の人と話をしたい

など、人それぞれでした。仕事をしていて困ることは、

- ・ 時間通りに物事が進まない
- ・ オーストラリア人と日本人との仕事の仕方の違い
- ・ 法律が違う 例) シートベルトを絶対に着用すること

などです。私たちも、乗った電車の到着時刻が予定よりも遅れていたということがありましたが、オーストラリアの人は、日本人に比べ時間に大雑把な傾向があり、仕事でも、急いでいるときはとても困るそうです。お話を聞いた方の中には、オーストラリアに住むことを親に反対されてけんかをしたという人や、家族と一緒にオーストラリアに来た人もおり、家族の理解も大事なのだと思います。最後に、英語をどのようにして勉強したのかを教えてくださいました。やはり、日本人がいる職場でも、オーストラリアの方とかかわる機会は非常に多いため、どの方もオーストラリアに来てから改めて英語を勉強していました。勉強は、

- ・ 寝る前によく使われる単語から順に引いて英語辞典を読む
- ・ ドラマや映画を観て、気に入ったフレーズを日常会話の中で使ってみる
- ・ ご近所の方がオーストラリアの方だから共通の話題で話をする

など、自分にあった方法で練習をしていました。しかし、どの方も日常会話の中で少しずつ使ってみて、話せる言葉を増やしたと言っていました。実際に生活の中で使えないと覚えた意味がないので、会話で使うことが大事とも教えてくださいました。

〈感想〉

私は、外国とのつながりのある仕事に就きたいと書きましたが、現地で仕事をするのと、日本でするのでは同じ仕事でも全く違うのだということがわかりました。外国で働く時は、英語でのコミュニケーションが一番大変だと思っていたのですが、話を聞いて、現地の日本と違う法律を知り、その国によって違う考え方や文化に合わせることも大変なことだと思いました。しかし、現地で働いている方々はどの方も、日本に戻りたいとはあまり思わないと話していて、そこで暮らしているからこそ分かる、現地のよさがあるのだと思いました。また、日本を出て気付く日本のよさもあると教えてくださいました。

しかし私は、英語が話せないと、日本のよさを知るどころか何も知ることができないと思います。今回の旅行先は、日本人がたくさん住んでいるところでしたが、もしそうでなかったら、自分一人ですることは今回の半分ぐらいだと思います。ですから、単語を覚えるだけでなく文法も練習して、会話ができるようになりたいと思いました。そうしないと、結局困るのは自分だと思います。

たくさんのことを優しく教えてくれた現地の日本人の方々に感謝して、自分の将来につなげられるようにしていきたいです。

V 海外研修を終えて

はじめは、現地の人と話をするのが不安でしたが、現地の方々はとても優しく、うまく話すことができなくても何度も聞き返してくれて、特にホストファミリーは本当の子供のように接してくれました。

また、オーストラリアは自然が豊かで、その自然を守る取組もしっかりしていて、日本も真似できるのではと思うことがたくさんありました。

この研修に参加して、自分の考えがまだ狭く、小さなものだと気づき、自分の力を知り、世界の大きさを知る良い機会になりました。

この経験を将来に生かせるようにしていきたいです。



(ステイ先の仲間と行った滝の近くで)



(オーストラリアの豊かな自然)

オーストラリアレポート

No.18 南外中学校 2年 鈴木竜也

I 初めての海外

僕が今回この海外派遣に参加したきっかけは、兄と姉のアドバイスです。二人とも以前にこの研修に参加しており、二人の話を聞いて、この研修に興味をもちました。しかし、僕は今まで日本から出たことがなく、説明会や勉強会に行っても、自分が海外に行くという実感が全く湧きませんでした。出発の4日ほど前から、兄や姉に「準備は出来たか？」等声をかけられるうちに、少しずつ実感が湧き始めました。と同時に、初めての海外旅行への不安も増してきました。

成田空港に到着し出発を待っていましたが、なぜか列がずっと進まず、空港のスタッフも来ない。友達と何かあったのではないかと、ふざけ半分で話していると、外国人スタッフが来て、並んでいた外国人客に向かって何か喋っていました。しっかりとは聞き取れませんでした。キャンセルになった、というような事を話しているのは分かりました。後から話を聞くと、その日僕たちが乗るはずだった飛行機の乗務員に欠員が出て欠航となり、初日は日本滞在となりました。海外旅行というものは、こんな理由でスケジュールどおりにいかない時もあるのだということも、そのときに学びました。

II テーマについて

研究テーマ

「分別、再利用などのゴミの処理を
さらに進めていくためには、どうしたらよいか？」

① テーマ設定の理由

僕がこのテーマを設定した理由は大きく二つあります。

一つめは、今の仙台市の再利用（リサイクル）への取組は、オーストラリアと比較したとき、どのようになっているのだろうか？と思ったからです。

二つめは、オーストラリアという国は広大な自然と種類豊かな動植物、そして豊富な資源を合わせもった「自然豊かな大陸」というイメージが



あったので、仙台市よりゴミの処理などについての意識が高いのではないかと思ったからです。

② 調べた内容

まずは、ゴミの分別についてです。ファームステイ先では左の写真のようにゴミ箱が二つあり、しっかり分別されていました。赤い方には、

GARBAGE ONLY と書いてあり、生ゴミ専用だそうです。そして黄色い方には、RECYCLABLES ONLY と書いてあり、リサイクル可能なゴミ専用だそうです。黄色い方はある程度たまったら、個人でリサイクルの施設に持っていくのだそうです。ファームステイ先は農家なので、家畜に生ゴミを与えるということを考えて、分別していたのだということに気づきました。その他にも、分別に関しては、ケアンズ市街に行ったときに気づいたことがありました。それは、日本では市街地にゴミ箱を置く際には、多くの場合 “ペットボトル” や “プラスチック” などと分別して置かれていますが、ケアンズではそうではありませんでした。ゴミ収集した後に分別するとは思えません。そう考えると、ゴミの分別については日本の方がしっかり取り組んでいるのではないかと思います。

次にリサイクルについてです。ファームステイ先は農家だったこともあり、食事によって出た生ゴミは、家畜に与えていました。また、買い物をしたときの買い物袋は、日本ほどは使われていませんでした。大きいものを買ったときや、お菓子などを多く買ったときは袋に入れてくれましたが、それらの袋もシンプルでサイズが小さめでした。できるだけゴミを出さないようにという工夫がされているのではないかと思います。

しかし、オーストラリアで仕事をしている日本人の方に聞いてみたところ、街の中のゴミ処理に関しては日本の方がていねいだと思うとおっしゃっていました。僕たちが訪れたケアンズは国立公園の近くということもあり比較的きれいに整えられていましたが、もっと都会に行くとポイ捨てが結構多いのだそうです。オーストラリアでは、広くリサイクルという概念が普及しているわけではないという話も伺いました。



ファームステイ先の周りを見渡す限りの草原と森林でした。ほぼ手付かずの自然が、10 km位先まで見えるなんて日本ではありえません。

そこで、出たゴミはどこに持っていくのかを質問したところ、ほとんどのゴミは地中に埋めるということでした。日本の約20倍の面積をもち、日本が1㎡に6人住んでいるのに対し、21㎡に1人しか住んでいないオーストラリアでは、埋めるための土地はたくさんあるのだということでした。

③ 調べた結果

リサイクルについての考え方は、オーストラリアは日本よりも進んでいないのではないかと思いますという印象を受けました。というよりも、オーストラリアではリサイクルのほかに処理方法があるので、リサイクルに力を入れる必要性がないのかもしれませんが、確かに、その土地に合った方法でゴミ処理をするという考えも必要かもしれませんが、国土のせまい日本では、やはりリサイクルや分別についての取組は大事なことであり、自分の住む場所に適した処理についてさらに考えていきたいと思いました。また、処理の前にできる工夫もまだまだたくさんあるのではないかと思います。具体的には、オーストラリアでやっているように、商品の包装を簡易にしたり、レジ袋をリサイクルしたりすることは可能なはずですが、几帳面な人が多い

日本人には、少し難しいかもしれませんが、ちょっとずつなら可能だと思います。

分別については、日本の方がオーストラリアより積極的に取り組んでいると思いました。日本以外の国を知ることによって、日本の取組のよさが見えてきました。例えば、公共の場所でも捨てるものによってゴミ箱を分けていることは、他国にも紹介できることではないかと思います。ゴミの収集が面倒などのデメリットがあるかもしれませんが、リサイクルにつながる第一歩としてとてもよいものだと、改めて思いました。

Ⅲ オーストラリアで働く日本人

オーストラリアで働いている日本人の方は、想像以上にたくさんいました。お土産屋の店員さんであったり、自然の家の管理人さんであったりと、たくさんいて正直驚きました。そこで、その方々にオーストラリアでの生活についてインタビューしてみました。

Q1 どうして、オーストラリアで働こうと思ったのですか？

A オーストラリアが好きだからです。

この質問に対しては、全ての方がこう答えました。どうして好きなのかの理由は、この自然が好きだ、英語が好きだ、など様々でしたが、皆さんオーストラリアが大好きなのだそうです。この答えに補足を付けた方がいたのですが、その答えにとっても納得できました。

僕たちが泊まった自然の家で働く大屋さんは、ここの自然がすごく好きだ、と言ったあと次のように補足してくれました。

“僕は日本にいた頃サラリーマンでした。毎日、1時間以上かけて仕事場に行き、夜9時過ぎに仕事が終わりと、そこからまた1時間以上かけて帰るという感じでした。夜に電車に乗っていると、将来何をを目指しているのか、将来があるのかというふうに見える人もいて、自分は将来こうなりたくないと思ったこともありました。しかし、そんな自分も将来については特に何も決まっていませんでした。あの頃の生活は特に刺激的なこともなく単調だったので、自分の人生を普通に終わらせたくない、と考え始めました。そして、今、私はここで働いています。もちろん来たばかりの頃はうまくコミュニケーションが取れず、苦労はたくさんあったけれど、その苦労の甲斐があって今とても楽しい生活を送っています。”

僕はこの話を聞いて、人間は自分の“こうしたい”“ああしたい”という強い気持ちがあれば、変わることができるのだなと心の底から感じました。

Q2 オーストラリアで働く上で大変だったことは？

A 言葉の壁。

どの方も、まずは相手に自分が思っていることを伝えるのに苦労したとおっしゃいました。特に、レストランのウェイターをなさっている方の話

を聞いた時に、その大変さがよくわかりました。オーストラリア人のお客さんからの注文を聞き取れず難儀していると、そのお客さんから“あなたはもういいから他の人を連れてきてくれ”と言われたそうです。その時に自分の無力さを痛感したと仰いました。そして言葉の壁を越えるためのアドバイスとして、“相手に伝わらないかもしれないけど、怖がらずにとにかく try する。”ということをお教えました。

英語を覚えるための手段は、皆さんそれぞれの方法で行っていました。洋楽を全て歌えるようにする人もいれば、地道に勉強する人もいました。特にその中で自分にもやれそうだったのは、洋画を字幕なしで見ることです。あるいは、字幕がついていても、その登場人物が言っている英語を少しでも聞きとるということです。自分の好きな（5回程度見て内容を知っている）映画なら今の自分でも実行可能なのではないかな？と思いました。実際に英語を使って仕事をしている人からのアドバイスなので、実行していきたいと思います。

・質問を通して

オーストラリアで働いている日本人の方々は粘り強い人が多いのではないかなと思いました。特に言語について質問したときに強くそう思いました。何度失敗しても諦めず、挑戦し成功を掴み取るというこれらの方々の話を聞き、憧れを感じました。

IV ファームステイ先



僕はボガートさんのお宅にステイしました。

左の写真はホストマザーのグラディスさんです。彼女は声が大きく、最初は怖い人なのかと思いましたが、とても優しい方でした。

色々な滝に連れて行ってってくれたり、ステイ先の広大な牧場を四輪バギーの後ろに乗せて見せてくれたりと、オーストラリアの自然をたくさん楽しませてくれました。



檻の中の小部屋

牛の絶叫...

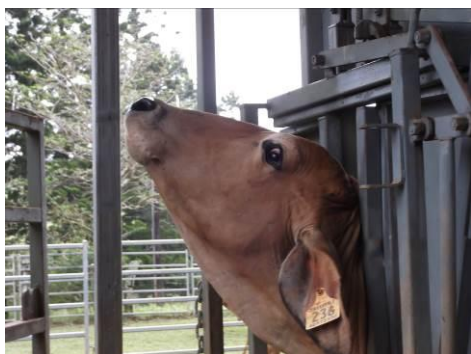
2日目には牛に関わる作業を見せていただきました。朝起きたら、昨日は空だった大きめの檻に、牛がたくさんいました。朝は、その牛たちのにぎやかな鳴き声で起きました。おやつのおあと、牛の檻の中に区切られた小部屋のようなところに行ってみると、そこは、左の写真のようになっていました。

これは、左下の写真のようにして使います。この作業は、牛に子供ができないようにするための注射をして、体に消毒の液体をかけるという作業です。隙間が一頭分しかないので一頭ずつなのですが、そこに牛が素直に入ってくれるとは限りません。当然暴れます、叫びます。す



牛をおさえる

ぐ近くで見ていると、少し怖かったけれども、牛それぞれの反応の違いにだんだん興味が沸いてきて、途中から楽しくなってきました。



牛は、本当に激しく暴れると、この写真のように首を激しく反ります。そして目は下を向きます。そうすると、目の白い部分が露出して今にも襲ってきそうで少し怖いのです。そして“フーフー”と強く息を吐きながら叫び声をあげます。

こんな状態の牛を見るのは初めてで、気持ちは複雑でしたが、その作業と牛の様子に釘付けになりました。

V 海外研修を通して

僕は、今回の海外研修を通して本当にたくさんのことを学びました。予想以上のことを予想以上に吸収することができたと思います。

その中でも特にコミュニケーションを取ることについて多くのことを学びました。まず、オーストラリアの人とコミュニケーションを取る、異言語でコミュニケーションをとるというのは気持ちが全てということでした。オーストラリアで働いている日本人の方の話にもありましたが、気持ちがあれば通じるということ、様々な場面で実感しました。

しかし、伝えることはできても、聞き取ることはほとんどできませんでした。自分の中の単語のレパートリーが少ないためだということ強く感じたので、これからたくさん勉強して、海外の方々と積極的に会話をしていけるようになりたいと思います。そしてなんと言っても、今回、この海外研修のおかげで経験できた全ての出会いを大事にし、これからの自分の生き方に繋げていきたいと思いました。

Australia Report

No.19 仙北中学校 2年 大釜千佳

I はじめに

私がこのオーストラリア研修に応募した理由は、「英語に関わる仕事をする」という将来の夢への第一歩として、外国へ行きたいという思いが強かったからです。私は幼い頃から英語が好きでした。年齢が上がるにつれ、外国のことに興味をもち、中学生になると、「実際に外国に行ってみたい」という気持ちが強くなりました。

研修に参加できることが決まった時は、喜びでいっぱいでした。それと同時に不安な気持ちもありましたが、みんなで過ごした9日間があっという間で、とても楽しかったです。

II テーマ設定の理由

- ・研究テーマ『美しい自然を未来に受け継いでいくためには、どうしたらよいか?』

大仙市には四季折々の美しい自然がたくさんあります。地域の誇りであるその自然は、ずっとこの先まであってほしいものです。この自然環境を受け継いでいくためには、どんな工夫があるのか、国内だけではなく、海外ではどんな工夫や取り組みをしているのかを調べたいと思い、このテーマを設定しました。

III 調べた内容

1 自然について

オーストラリアは日本に比べ、森林面積ははるかに多く、そこにいる動物たちも、オーストラリアの大自然をつくる要となっています。特に鳥の数が多く、600種類以上もいます。オーストラリアのOKギフトショップ（土産物店）で働く原田さんという方にお話をうかがう機会がありましたが、年に1, 2回日本に帰国した際に、朝に鳥の鳴き声が聞こえてこないと不自然に思うくらいだそうです。また、ファームステイ先の周辺は広大な緑が続いていました。ホストファザーがじょうろで水をまいたり、ホストファミリーが自ら手入れをしたりしていて、自然を大切にしようという気持ちが感じられました。

2 生活について

【水の節約】

私が一番驚いたのは水についてでした。ファームステイ先に浴槽がないだけでも驚いたのに、さらに「シャワーは3分以内」と言われ、たった3分という短時間でシャワーをすませることに驚きました。飲料水の値段も同じく店で売られているジュースより高く、日本では考えられない状況でした。

〔浴槽のない浴室〕



食事の時はいつも、食べ物が大きなワンプレートで出てきました。これも、食器の数を少なくしてお皿を洗う時の水の量を減らすための工夫だと思いました。

さらに、ファームステイ先のトイレには「排水溝が詰まりやすいため、トイレットペーパーの使用量は最小限にしてください。」という貼り紙がありました。排水溝にあまり水が通っていないのだと思いました。日本ではこのような状態を「不便」ととらえますが、オーストラリアでは「水を大事に使う」という積極的な気持ちの現れなのだと実感しました。



〔ワンプレートの食事〕

【ゴミについて】

ファームステイ先ではあまりゴミ箱を見かけませんでした。シンクの下にあったゴミ箱とシャワー室のゴミ箱くらいでした。各家庭でゴミを出さない生活を心がけているのがうかがえました。ただ、ゴミを分別している様子はありませんでした。分別の面では、日本の方が細かい印象を受けました。その点は、オーストラリアも、もう少し分別の問題を意識しなければいけないのではないかと思います。

また、オーストラリア人は使い捨てを嫌い、プラスチックの製品はほとんど使わないそうです。だから、無駄なゴミが出ないのだと思いました。

【電力などの節約】

ファームステイ先では、日中は太陽光を使った電気で過ごし、夜は台所一か所だけ電気をつけて過ごしていました。電力の節約にもなり、また、みんなが一つの部屋に集まってUNOをするなど、家族のコミュニケーションがとれるので、よい使い方だと思いました。

驚いたのがコンセントで、オーストラリアのコンセントは日本と違い、ハの字に差し込むようになっていました。また、差し込んだだけでは電気は通らず、スイッチを入れると通電するようになっていて、待機電力の節電になっていました。

オーストラリアでは、ほぼ全員がマイバッグを持って買い物をしていました。ゴミや二酸化炭素の削減につながる行動が普及しているのを肌で感じました。日本も今よりももっとマイバッグの利用が広がるといいと思います。

買い物も遠くまで行かないとお店がないためか、一度に大量に日用品を買っているようでした。お店も日用品や食料品を大量に安く売っていて、コストも安く、ガソリンの節約にもなり、感心させられました。

〔ソーラーパワーを取り入れた部屋〕



3 考察

オーストラリアは緑が多く、オーストラリア人の自然保護の意識が高いと思いました。それと比較すると、日本人は自然保護の意識が低く、ちょっとした意識改革が必要ではないかと思いました。一人一人の工夫があればこそ、自然を大切にしていけるのではないのでしょうか。だから、今の自然環境に満足していないで、今以上に生活を見直して、自然を大切にしていかなければならないと、オーストラリアに行つてつくづく考えさせられました。水の流しっぱなし、電気やテレビのつけっぱなしなどの「～しっぱなし」を自分たちが気をつけて止めると、エコにつながります。それを実行していかなければいけないと思いました。

IV エピソード

【ファームステイ】

私たちのグループは、BobさんとCarmelさんのお宅にお世話になりました。うまくコミュニケーションがとれるか、言葉が通じるか、本当に不安な状態で、ホストファミリーとの生活がスタートしました。



〔Carmelさんと〕



〔男子グループのお宅訪問〕

・1日目は、C班の男子グループが私たちのファームステイ先に遊びに来て、パパ（Bobさん）も加わって皆で一緒にUNOをしたり、昼食を食べたりしました。BobさんとCarmelさんのお宅は平屋でしたが、とても広く、敷地内にプールがありました。日本の家にはプールなどないので、見た時は本当に驚きました。また趣味で、牛、ヤギ、鶏を飼っていました。



〔機械による搾乳〕

・2日目は、パパとママ（Carmelさん）に連れられ、C班のファームステイ先へ行きました。そのお宅では酪農の仕事をしていて、その様子を見学させていただきました。それから、芝刈り機に乗せてもらいました。とてもスリリングで楽しかったです。このような体験はあまりできないので、よい思い出になりました。機械で乳搾りをしている場所も見せてもらいました。牛の糞が床全体にちらばっていて、足の踏み場がなく、匂いも強烈でした。子牛がいる所にも行きました。パパから「メスは乳があるから生かしているがオスは殺してしまう。」と聞きました。メスは乳牛、オスは食用として出荷されるとのことでした。

この日の夕食は、日本の料理を食べてもらうために、みんなで持ち寄った食材で稲庭そうめんとしじみ汁を作り、緑茶を添えました。パパとママに喜んで食べてもらえて嬉しかったです。

【オーギーキッズとの交流】

交流会では、たくさんのオーギーキッズと仲良くなることができました。みんなとても面白く、積極的な子供が多かったです。交流会では、チーム対抗の障害物レースをしたり、池で泳いだりしました。

食事の後は一緒にダンスをしました。さらに私たちは『アナと雪の女王』でおなじみの「Let it go(日本版)」を歌ったり、『妖怪ウォッチ』の「ようかい体操第一」を踊ったりしました。オーギーキッズはとても喜んでくれました。一緒に過ごした時間は本当に充実していました。



〔オーギーキッズと一緒にダンス〕

【キュランダ・アボリジニショー】

キュランダへ向かう時、テレビ番組『世界の車窓から』のオープニングに使われた風景を見ることができました。また、アボリジニショーでは、迫力のあるダンスを見ることができました。その他にもブーメランを投げる体験をしたり、アボリジニの楽器ディジュリドゥを吹いているところを見たりしました。



〔キュランダ溪谷鉄道〕



〔アボリジニショー〕

【ミコマスケイ】

船で片道約2時間揺られながらミコマスケイへ行きました。初めて生で見るエメラルドグリーン色の海、白い砂浜の美しさに感動しました。天気もとてもよく、紫外線の量が日本の7倍ということで日焼けが心配でしたが、そんなことはおかまいなく、美しい海のシュノーケリングを堪能しました。



〔ミコマスケイの砂浜と海〕



〔帆船でのクルーズ〕

V 海外で活躍している日本人

「OKギフトショップ」で働いている原田さんにお聞きしました。

Q1 オーストラリアに来て、困ったことや大変だったことは何ですか？

A オーストラリアと日本の国民性の違いについて戸惑いました。日本人は仕事にとっても真面目に取り組むし、時間を守るということも身につけていますが、オーストラリアの人々は大らかで人生を楽しむということが基本にあります。自分が日本で培った価値観や行動様式を変えていかなければ、オーストラリアでは生活していくのが大変です。

Q2 英語の勉強やコミュニケーションはどうしましたか？

A 英会話スクールへ通いました。英語を話せるようになるには会話が大事です。その際、話す「内容」と、それを相手に伝えたいという「思い」をしっかりとつことが大切です。
・他の質問もしたのですが、私にとって特に参考になったのはこの二つです。相手と理解し合うために、「話をしてコミュニケーションをとる」ことが大事なのだなと思いました。

VI 海外研修を終えて

この研修を通じて、たくさんの人と関わることができました。特にホストファミリーには、食事の世話を始め、色々な所へ連れていってもらうなど、大変お世話になりました。

同時に、自分の家族も同じようなことを毎日してくれているということに改めて気づき、家族への感謝の気持ちを新たにしました。自分が家族にどれだけ支えられているのかを実感することができました。

この研修で、「何事にも積極的に取り組む」姿勢が大切だということを感じました。今までの自分は、「与えられた物事に取り組む」だけでしたが、オーストラリアの人々とふれあい、彼らのフレンドリーな性格の底には、自ら物事に取り組もうとする積極性があるのではないかと考え、大いに影響を受けました。

そして、自分たちの住んでいる所はたくさん水が使えて、電気も使えて、恵まれているという思いも新たにしました。ふるさとを離れて別の環境で暮らし、比較してみると、改めて日本は素晴らしい所だと感じました。そのすばらしさを伝えていくための第一歩として、私たちのふるさと大仙市に貢献していけるよう、進んで地域の行事に参加したりボランティア活動に取り組んだりしていきたいです。

オーストラリアで学んだこと

No.20 太田中学校 2年 加藤 雅則

I はじめに

僕がこの海外派遣研修に参加した理由は、二つあります。

一つ目は、自分がこれまで学んできた英語が、海外でどれだけ通じるかを試してみたかったからです。

二つ目は、社会科の授業でオーストラリアが日本とつながりの深い国だと学び、興味をもったからです。

この研修が近づくにつれ、うまくコミュニケーションをとれるだろうかということが何よりも心配でした。でも、コミュニケーションをとることよりも、実際に自分の目で見たり、耳で聞いたり、感じたりして経験できたことが大きな財産になりました。



II 研究テーマ・設定の理由

(1) 研究テーマ：温暖化を食い止めるにはどうしたらよいか？

(2) 設定の理由：世界的な問題となっている地球温暖化を食い止めるために、オーストラリアではどのようなことを行っているのか、また、そのことを自分たちの生活にも生かすことができるのではないかと考え、この研究テーマを設定しました。

III 研究方法・調べた結果

(1) 研究方法

①ホストファミリーに聞く。 ②オーストラリアの生活を体験する。

(2) 調べた結果

①ホストファミリーにインタビューをしてわかったこと



質問に答えてくれたグランさん（左から二人目）とダニエルさん（一番左）

僕は、ファームステイでお世話になったグランさんとダニエルさんに、オーストラリアではどのような地球温暖化対策を行っているのかインタビューをしました。グランさんとダニエルさんは、丁寧に次のように答えてくれました。

オーストラリアでは、地球温暖化対策として、次のようなことを行っているそうです。

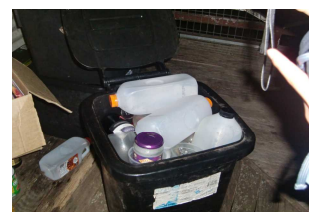
- ・二酸化炭素の排出量を減らす。
- ・風力発電、太陽光発電などの発電の時に温室効果ガスを排出しないクリーンエネルギーを利用する。
- ・電力を節約して使用する。

②オーストラリアの生活を体験して気付いたこと

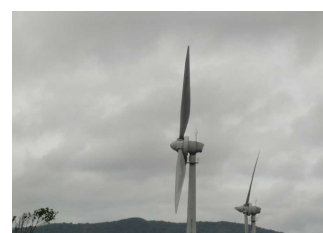
- ・右の写真のようにゴミはきちんと分別されていました。
→僕の予想では、グランさんたちが言っていたようにリサイクルするものと燃やすものを選別し、二酸化炭素の排出量を減らすためだと思いました。
- ・街中にたくさんのゴミ箱がありました。
→街をきれいにし、ポイ捨てを減らすための取組なのだと思います。
- ・風力発電用の風車が数え切れないくらいありました。
→グランさんたちが言っていたように、再生可能なエネルギーを使い、二酸化炭素の排出を防ぐためだと思いました。
- ・オーストラリアでは水をととても大切にしていました。
→僕たちのファームステイ先では、シャワーは5分以内と決められていました。雨が少ないためだと思いました。
ステイ先の家には大きいタンクがあり、そのタンクの中に入っている分の水しか使用できないそうです。
- ・たくさんのサングラスが店で販売されていました。
→オーストラリアは、紫外線が強いためだと思いました。



紙のゴミ



プラスチックのゴミ



風力発電の風車

(3) 考察

ゴミをきちんと分別して二酸化炭素の排出量を減らすという取組は、日本と同じでした。大きく違っていたことは、オーストラリアでは水が貴重な資源で大切にしている国だということでした。社会科の授業で勉強したように、オーストラリアは雨が少なく乾燥している国で、使用できる水には限りがあるということを実感しました。

また、店ではサングラスがたくさん売られていて、日差しもとても強かったので、太陽光発電はどうなっているのか疑問に思いました。インターネットで調べたところ、オーストラリアは日照に恵まれた広大な土地を持ちながら、太陽光発電の導入があまり進んでいないということで、現在、大規模太陽光発電商業化プロジェクトが進められているそうです。

大仙市でも、学習会で勉強したように、環境負荷低減のための行動を継続的に実践し、環境に優しいライフスタイルを身に付けるため、「環境家族宣言」という取組を行っています。エアコンの温度を上げる、電気をこまめに消すなどです。市で宣言しなくても市民全員が環境を大切に思い、オーストラリアのように、日頃から節約を心がけて生活することが大事なのだと思いました。

また、オーストラリアは日本に比べて道に落ちているゴミが少ないということを感じました。それは、日本はコンビニの近くなどにしかゴミ箱が置かれていないのに対し、オーストラリアでは、街中至る所にゴミ箱が置かれてあるからだと思いました。僕は、ゴミ箱をたくさん置かなくてもゴミを捨てないようにしたり、落ちているゴミを拾うように心がけることが大切だと思いました。

共通していることは、一人一人の心がけだと思います。

IV エピソードなど

(1) ファームステイ

僕たちがお世話になったファームステイ先の家には、犬が3匹、猫が1匹、それに鳥や蛇などもいました。特に蛇がいたことにはびっくりしました。70cmくらいの小さな蛇で、触ってみたら柔らかかったです。

1日目は、昼にハンバーガーを食べた後に、少し年上のダニエルさんとファームステイした4人を合わせた5人で、ジェンガやUNOをして遊びました。UNOでは、ダニエルさんがとても強かったです。UNOは、他の国の人とも遊べるゲームだということも知りました。夜にはパスタを食べました。日本で食べているパスタよりも太く、とてもおいしいと感じました。

2日目の午前は、最初に風力発電の風車を見に行きその後、動物園のようなところに行きました。そこにはたくさんの動物がいて、初めて見た動物もありました。いろいろな動物を見ることができて、とてもおもしろかったです。

午後は、たくさんの乳牛がいる牧場に行き、その後カーテンフィグツリーと呼ばれている木を見に行きました。右の写真のように木がカーテンのようになっているおもしろい形の木です。たくさんの観光客がいて、その木の写真を撮っていました。

夜には、日本から持っていった材料を使い、みんなで「きなこ」「あんこ」「みたらし」の白玉を作りました。ホストファミリーは、とてもおいしいと言ってくれました。嬉しかったです。

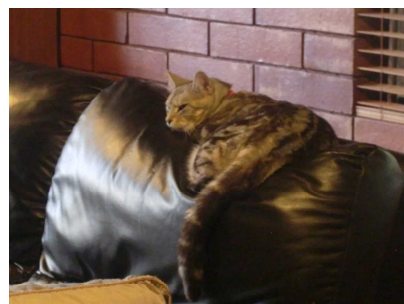
飛行機が欠航したことにより、1日短くなってしまったファームステイ生活でしたが、とてもよい思い出を作ることができました。

(2) キュランダ鉄道

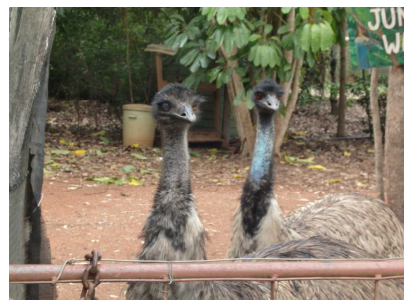
僕たちは8日、キュランダ溪谷鉄道に乗りました。キュランダ溪谷鉄道からは、大きな木々や滝など、壮大な景色を見ることができました。約1時間半くらい乗り、途中駅で10分間停車した時には、列車から降りてたくさんの写真を撮ることもできました。

(3) ミコマスケイ

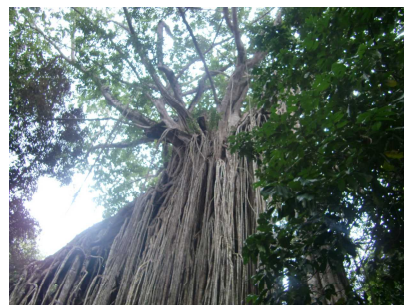
9日は、船に乗りミコマスケイに行きました。ミコマスケイはサンゴでできた島で、鳥がたくさんいました。ミコマスケイでは、シュノーケリングをして楽しみました。僕は、海で泳ぐのは初めてでしたが、水はとてもきれいで深いところまで見ることができて楽しかったです。



ステイ先の猫



初めて見た動物



カーテンフィグツリー



できあがった白玉



キュランダからの景色

す。海の中には、たくさんの綺麗な熱帯魚やカメなどがいました。この日は、晴れていたのに日差しが強く、かなり日焼けしてしまいました。

(4) 海外で活躍している日本人

今回、オーストラリアで働いている日本人6人の方々にインタビューをしてきました。その中でも、特に、OKギフトショップで働いている原田さんの話が印象に残りました。

Q. なぜ、オーストラリアに来たのですか？

A. 海外で働きたいと思ったことと、子供を海外で育てたいと思ったからです。

Q. オーストラリアに来て感じたことはどんなことですか？

A. オーストラリアでは、人の目を見て話をします。しっかりと自分の考えや感じたことを主張をする必要があるからです。

Q. 日本に帰りたと思ったことはありますか？

A. 日本も好きですが帰りたと思ったことはありません。

今回のインタビューを通して一番印象に残ったのは、原田さんがとても生き生きとしていたということと、「日本も好きだが、帰りたと思ったことはない」という言葉でした。

僕は、秋田が大好きで原田さんのように海外で生活しようとは思いませんが、前向きに生きている原田さんを見習いたいと思いました。

V 海外研修を終えて

僕は、家族や親類以外の家に泊まったことがなかったので、海外研修に行く前はとても不安でした。でも、ファームステイ先では、雨が降ったときに傘を貸してくれたり、シャワーを浴びるときにタオルを貸してくれたり、とても親切にしてくれて、お陰で快適に過ごすことができました。

自分の研究テーマである「オーストラリアの地球温暖化対策」については、自分で意識して見たり聞いたりして調べることができたのでよかったです。

また、コアラやワラビー、サンゴや熱帯魚など、テレビや本などでしか見たことがなかったたくさんの生き物を見ることができ、山や海などオーストラリアの自然の豊かさを感じ取ることができました。さらに、オーストラリアに行って日本のよさや課題を再発見することもできました。

ファームステイでは、英語を話せなくても、ジェスチャーなどを使ってうまくコミュニケーションをとり、自分の言いたいことが伝わったときは嬉しかったです。しかし、自分で話したいことを英語にすることができず、思ったことを伝えられなかったこともありました。これからはもっと英語を勉強して、自分の考えや感じたことを伝えられるようになりたいと思いました。



今回の海外研修では、一生忘れられない思い出をたくさん作ることができ、とても充実した海外研修でした。今回学んだことを今後の生活に活かして行きたいと思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった大仙市教育委員会、引率の先生方、添乗員の皆さんに心から感謝しています。ありがとうございました。

